をこり、露深き草を分て深谷に下りて芹をつみ、山河の流も早き巖瀬に柴をすゝぎ、袂しほれて干わぶる思ひは、昔し人丸が詠じける和歌の浦に藻汐垂れつゝ世を渡る、海士もかくやと思ひ遣る。つくづくと浮身の有様を案ずるに、佛の法を求めしに異らず――然ば法華經第七に云く、於我滅度後、應受持此經、是人於佛道、決定無有疑と云云。此文こそよに〳〵憑敷く候へ。此等をさま〴〵思ひつゞけて觀念の牀の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目を覺まし、我身の内に三諦卽一、一心三觀の月曇りなく澄けるを、無明深重の雲に引き覆はれつゝ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事、此砌りに知られつゝ、自らかくぞ思ひつゞけゝる。

立ち渡る身の浮雲も晴ぬべし
たえぬ御法の鷲の山嵐

＊　＊　＊　＊　＊

李桃物言はざれども下自ら逕をなす。上人の御入山以來、鎌倉に殘されたる御弟子を始め各地にある諸檀那は、日を追ふて追慕の情禁ずる能はず、態々米を擔ひ酒を携へて遙々崎嶇たる山河を越へ、親しく上人を身延の澤に訪ひ奉つて、互にその晩年を慰められた。又自ら上人を訪ひ得ぬ者は、使者に托して衣服その外種々の供養を調へて之を送られるなど、道がに今迄は白雲深く鎖してゐた身延の澤も、今は漸く日と共に賑ひ初めて、往ふさ返るさの信男信女は引きも切らず、毎日市の如く堂に流れて、庵室は愈々狹溢を感ずるに至つた。

於是實長は弘安三年庚申の歳、再び大に工事を起して終に方六丈の大蒲殿を營み、その年の十一月廿四日天台の正會を期して盛んに之が開堂の式を伸べ、同日三十餘人を以つて一日經を書寫せしめて之を供養し、更に大に遐齡延年の舞樂を奏して、以て法運嘉開の萬歳を祝した。又實長は上人に相馬の

僻あるを察して房の傍にさゝやかなる厩を構へ、驥蹄一頭之に御者を附して凡ての出入を送迎せしめた。

過ぎ行く月日に關守なく、峯の紅葉幾度か霜を置き代えて、今年は早や弘安四年、實長も前後八年の間親しく上人にお仕へして齢ひ既に耳順に達し、終に世を長子長義に讓つて自らは上人の弟子となり、或日吉辰を擇んで上人の御手を煩はして髪を毀ち、法名を法寂日圓と賜つて、以後只管唱題の中に餘生を送ることゝなつた。

翌五年、春去り夏來つて間垣の朝顔もいつしか色を失ひ、宵々は早や袂涼しき文月中旬の頃、上人には偶々微恙を感ぜられて御食事もやゝ減じ、日毎の起居も何となく物憂き御樣子に、之を聞ひて馳せ集る御弟子諸檀那は勿論のこと、中にも實長は深く之を憂慮し、日夜枕頭を離れず御介抱申上げてゐたが、病勢更に衰へず、上人も愈々死を覺悟遊ばされてか、心中私かに釋尊の

先例に倣つて、身延より丑寅の隅に當る武藏の國千束の郷池上宗仲の館に滅を示さんと思ひ立ち、終に九月の八日餘處ながら實長に永の暇を告げて深くその法勞を謝し、九個年の間住み馴れし山河を後に身延の澤を出發遊ばされることゝなつた。此時實長は泣いてその別れを惜み、止むなく二男實繼を供奉せしめて嶮惡なる山河の旅を助けしめ、更に上人の望みに任せて快馬一頭幷に御者を添へてその行を見送らせた。

實繼始め多くの御弟子諸檀那に援けられつゝ、十八日の午の刻漸く池上の館に着かせられた上人は、長途の旅にやゝ病の疲勞を感じながらも、或日力なき御手に筆を起して、始め自らの生立ちより、中頃一代に於ける奮鬪的歴史の數々を綴り、終り身延に於ける晩年の生涯を回顧せられて、先づ

「……同十七日甲斐國波木井の郷へ着きぬ。波木井殿に對面有りしかば大に悅び、今生は實長が身に及ばん程は見つぎ奉るべし。後生をば聖人助け給

へと契りし事はたゞごとゝも覺えず、偏に慈父悲母の波木井殿の身に入りかはり日蓮をば哀み給ふ歟」

と最初波木井の館に於ける實長との現當二世の約束を交せしことを述べ更に筆を進めて

「其後身延山に分け入つて山中に居し法華經を晝夜讀誦し奉り候へば、三世の諸佛十方の諸佛菩薩も此砌におはすらん。釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を說き給ふ。日蓮は身延山に居して九箇年の讀誦也。傳敎大師は比叡山に居して三十餘年の法華經の行者也。雖然彼山は濁れる山也。我此山は天竺の靈山にも勝れ日域の比叡山にも勝れたり。然れば吹く風もゆるぐ草木も流るゝ水の音までも、此山には妙法の五字を唱へすと云ふことなし。日蓮が弟子檀那等は此山を本として參るべし。此則ち靈山の契也」

と身延を以つて末法に於ける靈山となし、更に又筆を暢べて

「時に六十一と申す弘安五年壬午九月八日、身延山を立ちて武藏國千束郷池上へ着きぬ。釋迦佛は天竺の靈山に居して八箇年法華經を說せ給ふ。御入滅は靈山より艮に當れる東天竺倶尸那城跋提河の純陀が家に居して御入滅なりしかども、八箇年法華經を說せ給ふ山なればとて、御墓をば靈山に建てさせ給ひき。されば日蓮も如是身延山より艮に當りて武藏國池上右衞門大夫宗仲が家にして可死候歟。縱ひいづくにて死に候とも、九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉り候山なれば、墓をば身延山に立てさせ給へ。未來際まで心は身延山に可住候」

と身延を以て盡未來際永劫に棲神の淨土と定め、縱ひ釋尊の例に習つて非滅の滅を池上に示すと雖も、墓をば必ず身延山に建つ可きことを遺言し、最後に實長に依つて身延山に心安く九箇年の讀誦を得たることを感謝して

「日蓮は日本六十六箇國島二つの內に五尺に足らざる身を一つ置く處なく候

ひしが、波木井殿の御育みにて九箇年の間、身延山にして心安く法華經を讀誦し奉り候つる志をば、いつの世にか忘れ候べき。しらずや此人は無邊行菩薩の再誕にてや御座すらん。日蓮は日本第一の法華經の行者也。日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ、梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乘りて通り給ふべし。此法華經は三途の川にては船となり死出の山にては大白牛車となり。冥途にては燈となり靈山へ參る橋也。靈山へまして艮の廊にて尋ねさせ給へ。必ず待ち奉るべく候。但し各々の信心に依るべく候。信心だも弱くばいかに日蓮が弟子檀那と名乘らせ給ふともよも御用ひは候はじ。心に二つまし〳〵て信心だに弱く候はゞ、峯の石の谷へころび、空の雨の大地へ落つると思食せ。大阿鼻地獄疑ひあるべからず。其時日蓮を恨みさせ給ふな。返す返すも各の信心に依るべく候。大通結緣の者は地獄に墮ちて三千塵點劫を經候ひき。久遠下種の輩は地獄に墮ちて五百塵點劫を經たる事、大惡知識にあうて法華經をおろそかに信ぜし故也。返す〴〵も能々信心候て、事故なく靈山へまして日蓮を尋ねさせ給へ。其時委しく可申候。南無妙法蓮華經。」

と結び、以つて約に從つて靈山の導きをなし、固く決定の信心を勸めてその不退を促がし、萬事を靈山の再會に讓つて長い手紙の筆を結ばれた。そして上人は之を實繼の歸りに托して、遙かに實長及びその周圍の人々に送られたのである。

それより五日の間、池上の館には悲しい日が打ち續いて、同じ月の十二日の夜、千古の偉傑上人には終に慈顏笑を含ませながら、寶體眠るが如く非滅現滅の大涅槃を示された。於是十五日寶棺を荼毘に附して翌十六日初七日の御供養を申し上げ、廿一日の朝御弟子檀越一同御眞骨を奉じて池上を出立し、

途中宿りを重ねつゝ廿五日無事身延へ着せらるゝことゝなつた。此時實長は父子もろ共喪服を着して途中まで之を出迎へ、涙ながらに御遺骨を先導して昔ながらの御庵室に之を奉安し、それより二七日忌、及び中陰の御法會の終るを迄、寢食を忘れて内外のことに奔走した。

中陰の佛事を終つて後、六上足の人々は御廟所の邊り近く各々庵室を構へて死後の御給仕を申し上げ、弘安六年癸未正月廿三日百個日の喪を終るに及んで茲に輪番の制を定め、正月は日昭二月は日朗、三月日傳日賢四月日頂、五月日持、六月日辨日忍、七月日合伊賀八月日法日位、九月日興十月日實日保、十一月日向十二月日秀日家と記して、先づその月は日昭上人最初の御番を初められることゝなつた。

然るにその後弘安八年十一月、丁度日向上人輪次の時、實長は過去三個年間の經驗に鑑みて窃かに輪番の非を思ひ立ち、如何にもして一宗の道場たる

上人棲神の靈窟をして萬年の基礎を確立せしめ度く、或日御廟へ參詣の序でに日向上人を訪問して、色々それらのことを精しく議られた。

「守塔輪次の御遺命の嚴かなることは、實長元より之を存じて居りまするが、今にして之を見れば各聖互に主伴となつて旅泊の想をなさるゝは理の當然、さすれば縱へ衰亡に赴くとは云へ榮へゆく道理は御座りませぬ。折角一家の祖山上人棲神の御靈窟にして、若し荒廢に歸するやうなことがありましては、ついに百年臍を噬むとも及ばぬことゝ思ひまする。加ふるに今天下諍からず何時何如なる危難を蒙るやも計られぬ場合、何卒尊者より各御上足に此議よしなにお取り計ひ下さるやう、偏へに願はしう存じまする」

と云へば日向上人も祖山を思ふ實長の先見に感心して

「護法に厚き御深慮の程、日向誠に忝ふ思ひまする。何れ此議何とか各位にお謀り申上げて、御芳志に添ひ奉ることで御座りませう」

粉骨碎身九年の奉公

と實長の議を容れて之を他の五上足方に謀られた。五上足方も實長が護法の一語には戻ることもえ能らず、終に其議を容れて茲に輪次の制を廢することとなつた。於是實長は更に日昭上人に謀つて更めて日向上人を祖山の第二主に請待し、以後上人と共に永く力を協せて頻りに祖山の繁榮を計つたのである。

かくて實長は年を重ぬると共に愈々信地に住して、身延を崇重すること恰も宗家を見るが如く、日々御廟に參拜してはその都度日向上人を訪問し、又御廟側に廬を結んで心喪を盡せる日賴上人(四條金吾賴基)を訪問してはありし昔のことども打ち語ひながら、互にその情を慰めてゐた。そして永仁五年丁酉九月廿五日、七十六歳を一期として、唱題聲裡溘焉靈山に上人の後を追はれたのである。

八日頂上人

▲泣銀杏

「日頂はまだ見えぬか？」襖を隔てて、富本殿の重々しい聲が聞える。

「まだ推參いたされませぬ」次の室からは、隨身の一人が、不安そうに恁ふ答へた。

弘安七年十月十三日、武州池上の精舍には、この日大聖人三週年の御忌が、御遺弟の人々によつて催さるる事となつた。遙々諸國から集つてくる僧俗男女の群は、朝早くより引きも切らず お山を指して登つてくる。晝頃にはもう御遺弟中の一番遲いと思はるゝ人々も、大抵は皆集り揃つた樣子であつた。然るに晝も過ぎ、これからいよ〳〵御忌の大法要が始まらふといふ末の刻にな

つても、まだ日頂上人のお姿のみは見へなかつた。

「日頂師は如何遊されたので御座らう」

並みゐる人々の頭には、幾度かこの疑問が繰り返されてゐた。

「さ、鎌倉にお居でと云ふこと丈けは承和致しましてムるが、まさかにこの御忌に御出席遊ばされぬこともムりますまい」

「何にいたせ、御上足の御身であれば、他の人よりも、早々御登山然るべく思はれまするが……」

「したが、この大事の御忌を御存知ない理もムりますまい。何か火急な御用でも、おありなさるのでムりませう」

人々は、色々に噂し合つた。

と、又しても富木殿の重々しい聲が聞える。

「日頂はまだ見えぬか？」

聲にやゝ怒りを含んでゐる。

「まだ推參いたされませぬ」

次の間からは、同じ様な聲が靜かに答へる。

本堂及び下座敷の騷しさに引きかへて、玆襖一重を隔てた奥の一間には、恐しい不安な沈黙が續いてゐた。日昭聖人を始めとして、日朗、日向、日興、日持の五上足、中にも富木日常上人の眉字の間には、容易ならぬ色が漂つて、何れも皆口を結び、一處を見詰ながら、耳を澄ましてゐる。

時は刻一刻と過ぎてゆく。日頂上人の姿はまだ見えぬ。

「日昭殿」

と、富木上人は靜かに聲をかけられた。「僅か日頂一人の爲めに、この大法要の時を過さるゝこと、日常は眞とに心苦しう覺えまする。方々の御厚意は、何とも謝するに言葉はムりませぬが、然し何時まで待つとも賴りない徒らご

と、最早や疾うに佛前の仕度も整ひおる樣子なれば、何卒御昇殿の御用意を下さるやう……」

日昭上人は、暫く嘿して居られたが、軈て決心せるもの丶如く

「然らば御免下さりませう」

と、お請して、偖左右の上足方にも輕く會釋を遊ばされた。

本堂は今や丁度人の出盛り。佛前の清淨な壇上に飾られた祖師の新しい位牌の前には、香華燈明、茶菓餉飯等、具さに備つて、その前には整然と經席が設けられ、それを廻つて一般の信男信女が端然として座つてゐる。そして皆口々にお題目を低唱しながら、千載一遇のこの大法要の初まるのを俟つてゐる。

と、恰かもこの時、滿山の空氣を壓して、天地に響き渡る大太鼓の音、次いで聞ゆる般々たる半鐘の聲、參詣の信男信女は、言ひ合せた如く皆一樣に、

廊下の方を伏し望んだ。一山の大衆は、六老僧の最上位日昭上人大導師の下に行列正しく、靜かに本堂へと繰り込んでくる。

かくして式は順次に型の如く運ばれて、申の刻頃には無事その終りを告げた。これからいよ〳〵御廟參といふのである。

今朝未明に鎌倉を立つて、心急かるゝまゝ、飛ぶが如くに十里餘りの道を只走りに走つて、漸く今お山へ着いたばかりの日頂上人、ホッと息吐く暇もなく、先づその目に映じたものは、秋の空林を彩つて、その間に隱顯する美しい御廟參の行列であつた。

「あゝ！」と上人は思はず嘆息して、今迄の張り詰めた元氣も、一時に消えゆくやうに思はれた。いひ知れぬ情緒が麻の如く胸に亂れて、熱い涙が覺えず頬を傳つた。

「あゝ、はや御法會は終りしか！」

泣銀杏

悄然として足を進められた上人は此時フト思ひ出たやうに足を早めて「せめては、御廟所にての御燒香なりと申し上げん」

と、左手に笠を脱し、右手に杖を曳きながら、軈て本堂の前まで來ると、

茲に恭しく大地に跪いて、御師のお位牌に遠く三禮を施し、それより再び足を早めて、草鞋のまゝに御廟所へと急がれた。

御廟所にては、御廟參の御經も終つて、今丁度日昭上人始め上足方の順次に墓前に跪いてお燒香を遊ばさうといふところ、そこへ人々の間を縫ひながら、漸く墓側へ脱け出でた日頂上人、先づ第一に申し開きたい遲參の理由の數々も、暫く御墓前を憚つていふこともえならず、唯だ各上足方へ簡單なる御會釋を遊されたまゝ、今御燒香をなし終つた日持上人のお後へ立たふとした。

と、この時突如、後ろより御父富木上人の聲として

「遲參者には、お燒香の儀は罷りならぬッ！」

と唯一言！　嚴乎として上人の耳朶を衝き破つた。日頂上人ハッとして思はず後へ飛び退き

「えゝッ！　お燒香の儀は叶ひませぬとや!?」

と餘りのことに暫し忙然――や、暫く立ち上る香の煙を見詰めて居たが、軈て悄然として首うなだれ

「あゝ、お燒香さへも、叶ひませぬかッ!?」

と思ひに餘る悲しさ口惜しさに、斷腸の涙をハラ〳〵と滾して、小兒の如く御墓前へ泣き崩れてしまつた。五老僧始めそこに居竝ぶ人々は、父は義に泣き子は不孝に泣くこの美しい活悲劇を親り見て、皆思はず同情の涙に法衣の袖を絞つたのである。

夢の如くに人々の歸つてゆく氣配が、暫く後の方に聞えてゐた――と思ふ

間もなく四圍は急に寂寞として徒らに秋の木の葉のみが、風もないのにハラ〳〵と肩に散りかゝつてくる。上人は恰も夢より覺めた人の如く、涙を拭ひながらやをら身を起して、靜かに前後左右を見廻はされた。嚴しい父の氣を兼ねてか、そこには誰一人自分を慰めてくれる人の姿も見えなかつた。唯だ彼方に捨て置いた自分の杖と笠とのみが、寂しげに自分を待つてくれてゐる計りであつた。

上人はツト立ち上がつて、跟めく如く二三歩前へ摺り寄つた。そして御墓の際へ兩手をつくや、又新しい涙に誘はれて、限りない悲みに、胸は恰も張り裂けそう。心ない香の煙は、爽かな秋の空氣を彩つて、白龍の戯れるが如く緩かに上人の身邊を流れてゐる。

上人は魅入られた人の如く、我にもあらず香を捻んで、夢中にこれを燒かうとした——と、何處よりともなく、耳朶を掠めて再び父上の聲が聞えてく

る。

「遲參者には、お燒香の儀は罷りならぬッ！」

又しても上人の胸は慚愧と恐怖とに打ちつぶれて、香捻つ手は自ら震へ戰くのであつた。

「進退共に不孝の罪を免れぬ日頂、あゝ何として、申開きを致すであらう」

悔恨の涙は滂沱として、いつ盡くべしとも覺えない。今にも天柱崩れ地軸は裂けて、この不孝な身を置くに處も無いかと思ふ計り——上人は僅かに心の中に恁ふ思つた。

「これと云ふも畢竟するに法の爲餘儀ない事情に迫られての事なれば、今この御墓前に委しく事情を打ち開けて、御師の寛大なる憐みを乞ふことに致すであらう。御師とても、日頂が苦衷を憐んで、必ずや不孝の罪を御許し下さるに違いない。」

かくて上人は、涙を收め、襟を正うして、恭しく御師の御墓標を仰ぎ見た。

「實は日頂、唯今鎌倉に於て法門の弘通中、二三日前より偶他宗門の權僧原と法戰を搆へ、事昨日に至るも未だ勝敗を決するに至らずして、兎角の議論に時を移す中、はや御師の御忌も明日に迫れば、玆暫くは法戰を延期せよと申込みし處、彼等は之を以つて、却つて奇貨措く可からずとなし、日を揃へて嘲り詈つて云ふやう、否とよ、法論は一宗の關はる處、何事たりとも私事を以つて、決して延期すべきものにあらず。汝或は豫め法論に敗けんとを恐れて、師の御忌を口實に、我等が正義の折伏を避けんの下心なるべし。さても剛情我慢の日蓮が弟子にも似合はぬ臆病者、口には徒らに大言壯語を吐くと雖も、いよ〳〵事を決する場合には、狗鼠の如く逃げ隱れんとする卑怯者。往け！　汝は唯だ却つて汝が敗を示すものに外ならぬわッと、言はれし時の日頂、無念心根に徹して引くに引かれぬ男の意氣地！　一は大事の御法を傷

けんことを憂ひ、他は又御師の德を害はんとを恐れて、明日は復た無い御師の御忌とは知りつゝも、昨夜一夜を計らずも法戰に時を過して、首尾よく凱歌をも奏したれば、やれ嬉しやと思ふ間もなく、急ぎ馳せ來て見れば、身は却つて大不孝の者となり果て居りしこそ、日頂は返すぐも口惜うムります る。」

いつの間にか上人の頭は大地に深く擦り付けられて、滝なす涙は黑く一面に乾いた土を濡してゐた。

「何卒日頂が苦衷を憐れと思召し下さるやう、偏へにお願ひ申上げ奉ります」

聖人の體軀は死せるが如く、いつまでも大地に顏を埋めたまゝ、少しも動かふともしなかつた。

庫裡には、これから持齋が初まらふとするのであらふ。擊柝の音が、賑はしく而かも幽かに聞えてゐる。秋の木の葉は、又しても心なく上人の法衣の

袖に散りかゝるのであつた。

やゝあつて上人は、涙に濡れた眼を拭きながら、靜かに身を起して立ち上がつた。そして輕く膝の埃を打ち拂つて、偖改めて御墓標に慇懃なる禮拜を遊ばされ、それより徐ろに歩を移して、その片隅に、力なく自分の杖と笠とを拾はれた。今御墓前に、餘儀ない遲參の事情を申し開いて、少しは心も落着いて來たのであらう。お顏にはやゝ晴やかな色が動いてゐた。

それから暫時經つて、上人の恐れに滿ちた愼ましやかな姿は、庫裡の大奥の次の間に見出された。上段の間と次ぎの間との間には、美しい山水の襖がピッシリ閉められて、唯だ右手の隅の一枚のみが僅かに開けられてある。日昭上人と日朗上人とは如何にも憂はしげな顏に、代るゞゝその間を出入して、共に義に泣くこれら父子の間を頻りに斡旋してゐた。軈て二上足によつて上段の間に導かれた上人は、闇際に少さく座を占めて、改めて御父富木上人に

謁拜を賜はつた。そして一應遲參の理由を手短かに申し開いて

「右樣の次第なれば、何卒日頂が心事を憐れに思ぼし下されて、せめては御廟所にての御燒香なりと御許し下さるやう、日頂が一期のお願ひにムります る」

と只管その宥恕を願つたのである。二上足初め、日向日興日持の三上足も、その側から言葉を盡して、共にそのお許しを願はれた。

けれども、御父富木上人のお怒りは、意外にも强かつた。上人は襟を正し座を進めて、聲嚴かに言はるゝやう

「設ひ法論たりとも、弟子として御師の御忌を缺くことやある。法論は常のこと、御師の御忌は再び逢ひ難かるべし。汝苟も御師より六上足の一人に數へられながら、滅後僅かに三年を出ずして、早くもかゝる惡例を後世に貽さんこと、罪眞とに死に當ると云ふべし。これ實に父日常の忍びざる處で

ある――」

と、更に言葉を改めて、他の五上足の方々に打ち向はせられ

「日頂は到底法器ではムりませぬ。折角各々方の御配慮なれど、今日さる悪例を許すならば、千載不孝の罪を許すことになりまする。日頂には永の暇を遣はすでムりましやう」

と丁寧に會釋して、再び又日頂上人に座を向けられ、一際聲を激しながら、キッと上人の額を打ち睨んで

「日頂！」

と、一聲高く呼び据えた。

「七生の勘當なるぞ。目通りならぬわッ！」

と、涙をかくす大慈の利劍！　大義の爲めには、盡きせぬ父子の緣を切つて、千載の指針を示されたる丈夫の決斷！

この聲に、一座は水撒ちたる如く打ちしめつて、並み居る五上足方の御目には、同情の涙の露が宿つてゐた。滿山の大衆も、爲めに鳴りを鎭めて、咳の聲さへ一つするものがない。その間を續いては止み、止んでは又續く、血を絞るやうな上人の泣聲のみが、何時までも幽かに響き渡つて、人々の腸を千々に搔き拐つた。

＊　＊　＊　＊　＊

翌る日富木上人は、五上足及び其他の人々と途中に別れを告げて、二人の從者と共に、その日の夕暮方、若宮の己が舘に歸られた。日頂上人も、泣く〳〵父上のお後を慕ふて、秋蟲の月に泣きしきる刻、漸く若宮の里に辿り着かれた。

遠く望めば、父上の舘の側には、小供の時からのおなじみな銀杏の大樹が、今宵十四日の月に黑く煙つて、夢の如うに天を劃つて見えてゐる。上人は御

勘氣を蒙つた身の、見るもの聞くもの、總ての物に一入物の哀を感じながら、軈て其樹の下に忍び寄られて、暫く疲れた脚を休められた。葉陰を洩れてくる月影は、その根方に悄然として腰打ち掛けた上人の横顔を淋しく照して、四圍りには冷たい秋の氣が充ち滿ちてゐた。

小供の時にはよく、弟等とこの樹の下に群れ來ては、色々の戯事に日の暮れるも知らずに遊んでゐたこともあつた。その後とて度々の歸山にいつも上人が心に故郷の懷しさを思はせるものは、矢張りこの幼なゝじみの銀杏の樹であつた。それが今宵は如何したのであろう。却つて哀しいものゝ一つとなつて、泌々故郷の寂さを思はせる。上人は銀杏の大樹を仰ぎ見ながら、幾度か長い吐息を洩らされた。

「せめて恁ふいふ時に母上にてもお在宅になるならば、又何とかして父上にお配慮を願はふものを、母上には先つ年既に日證や妙國に伴はれて遠く今は

富士の裾野に御隱世遊ばされてゐる――」

上人の心には、最早や頼みの綱も切れ果てゝ、折角こゝまで來はしたれど、誰を頼まふ施術も、一切徒事のやうに思はれた。

「最早やこの上は、佛天の御加護によつて、一日も早く御勘氣の赦るやう、お願ひ申すより外仕方がない」

絶望の中にも、漸く一道の光明を認め得た上人は、眉宇の間に快い決心の色を示して、蠡くと計り立ち上がつた。そして遙かに父上の御居間の方を伏し拜んで、專心神佛に祈願を罩むること稍暫時

「願くは一時も早く父上の御勘氣の赦りますやう、偏へに御加被の程をお願ひ申しまする」

と、せきくる涙を拭いもあえず、徐ろに歩を移して、銀杏の大樹を經行りつゝ、聲いと靜かに唱へ出す寶塔品の偈文！

「此經難持――若暫持者――我卽歡喜――諸佛亦然――」

一歩は一歩よりも緩かに、一聲は一聲よりも物哀れに、踏み止まつては聲を含み、進んでは又唱へ出す、一唱一涙お詫びの經行。上人は聲を打ち震はしながら

「如是之人――諸佛所嘆――是則勇猛――是則精進――」

と續けてゆく。そして遠く秋の月に消えゆく自分の聲の行末に耳を澄ませては、座ろに迫りくる孤獨の哀愁に胸を抱いて、果ては銀杏の大樹に顏を埋めたまゝ、身も世もあらず嘘晞るのであつた。

月は段々西に傾いて、夜はホノボノと明け渡つても、上人のお經の聲はいつ迄も續いてゐた。日は昇り日は傾いて、身は飢と疲れに惱まされても、上人のお經の聲はいつまでも絶ゆる時がなかつたのである。

上人は斯くして七日七夜の間、この銀杏の樹の下を經行つゝ、泣き明かし

讀み暮して、只管に御勘氣の赦さるゝやう、專心神佛に祈願を罩めたのである。

けれども、あゝ實に父上のお怒りは、終に結ぼれた絲の如くに解けなかつた。上人は天に慟し地に哭して今更の如く自分の罪の重且つ大なるに身を震はした。そして銀杏の根方に泣き沈んで、只一つの賴みの綱と取り縋つた神佛にさへ見放された身を、つく〴〵賴りない哀しいものに思はれた。

軈て上人は、力なく再び父上の方を伏し拜んで、それより喪心せるもの、如く、飢と疲れと悲みとに、蹌踉として元來た道を引き返された。けれども廣い天地に容られぬ身は、最早や何處を指して往かふといふ當もなかつた。上人は止むなく眞間の自坊に蟄居して、深く謹愼の意を表しつ、專ら懺悔の讀經三昧に入られてゐたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

浸銀杏

若宮の銀杏の大樹に幾座か秋は訪れて、その度毎小さな青葉は美しい黄金の色に染め出された。今年世は「正安元年巳亥の春を迎えて、富木日常上人には八十四歳の高齢を重ねられた。寄る年波には貴賤貧富の別はない。上人には不圖した風邪が因となつて、重い枕に着いたなり、そのまゝ病の人となつてしまつた。

三月四日、病勢頓に改まつて、餘命もはや幾何もないことを知召してか、法弟帥の阿闍利日高上人を枕邊近く招き寄せられ、細々と後事を託して、偖五老僧を始め、夫々有縁の人々へも病氣の由使者を以つて言い贈らせた。

四五日の後には、日昭日朗の兩上足は勿論のこと、有縁の人々は取るものも取り敢ゑず、皆悉く若宮の館に集まつた。日頂上人も、この事を傳へ聞いて、驚愕一方ならず、殆んど狂せん計りに眞間を駈け出して飛ぶが如く若宮の館へ駈せ着けた。と、うち見れは、成程門口を出入する人々の數も、

いつになく多いやうである。上人はこれに先づ胸つぶれて、我にもあらず門口を這入ふとした。けれども不圖我に返つて

「あゝ、自分は御勘氣を蒙つた身の上である」

と、氣がつくと、悲さが一時に込み上げて來て、暗んだ目に四邊が急に眞暗に見えた。

上人は詮方なく、父上の枕頭に侍して親しく御看護申上げてゐる人々の自由を羨みながら、悄然として獨り銀杏の樹の下に歩を進めた。天にも地にも掛替のない、たッた一人の父上が、今はの際にさへ逢ふともならず、淋しく樹の下に取り殘されてゐる自分が、つく〴〵悲しいものに思はれた。

上人は樹の下に端座して、只管父上の病氣の平愈いたすやう、そして御勘氣の一刻も早く赦さるゝやう、强盛の讀經三昧に這込られた。けれども時々齎らす人々の報知によつて、御病氣は日に增し險惡に赴いてゆくことを知た。

三月廿日、二旬餘りの御病氣に、富木上人のお體軀は痛く痩せ衰へて、昨日あたりよりは食事さへ一口も召し上がらず、今は漸く御目に涅槃の色を示して、御臨終のいよ〳〵逼迫して來たことを知らしめた。左右に居並ぶ人々の頭には、皆一樣に、萬斛の涙を呑みながら、銀杏の樹の下に打ち萎れて、他處ながら父上の御病氣を憂慮はれてゐる日頂上人の痛はしい姿が浮んで來た。

この時日昭日朗の二上足は、やをら上人の枕邊近く摺り寄られて、偖言葉靜かにその後に於ける日頂師の謹愼の樣子など、逐一物語られて後、同情の涙に目を濕しながら

「若し貴邊にして、このまゝ御最後とも相成りますれば、日頂師は生々世々不義不孝の罪に泣かれることでムりませう。何卒この日昭日朗に唯だ一と言、「赦す！」との御言葉を下し置かれ賜はるやう、こゝに居並ぶ我等一同のお願にムりまする」

と、情を盡してのお詫の言葉に、上人は子を思ふ老の身の、遒かに恩愛の情に胸を搔き拐られながらも、ヂッと落つる涙を推し隱して

「いつもながら方々の御厚意には、日常何しも謝するに言葉はムりませぬ。されど自ら持つ內典の孝經に傷をつけ、知恩報恩の大義を辨へぬ不孝者に、何としてその罪を赦すことが出來ませう。御師聖人御在世の時ならば兎も角も、今日さる惡例を赦すならば、末代本化の家風を敗ることになりまする。日頂の勘當ばかりは、何卒このまゝに致し下さるやう、日常が心の中お察し下されたし——」

と、言い終るや、靜かに身を起して、自ら病體に召された小袖を脫ぎ取られ、今は隱すに由ない老の涙をハラ〳〵と滾して

「切めて之を遺品とも見るやう、日頂にお渡しを願ひまする」

と、日朗上人に托された。

日朗上人は、恰も自分の事にてもある如く打ち喜び、恭〻之を受けながらも、取る手遲しと立ち上がつて、急ぎ銀杏の樹の下に馳せて來つ、泣き入る日頂師を抱き起して、手短かに一什始終の物語りをなし

「偖これは、唯今お父上より日朗に托された、貴邊へのお遺品でムります る！」

と、慇懃に手渡しすれば、日頂上人は、餘りの事にお禮の言葉さへ口には出ですず、唯だ嬉し涙にかきくれてこの意味深かい父の勘氣を身に覺え、遺品の小袖を顏に押しあてながら、心ゆくばかり父子恩愛の情に泣かれたのである。

軈て日朗上人は泣き沈む日頂上人を惜みつゝ、ハヤお父上の御臨終も間際にあるべきことを告げ知して、自分は急ぎ踵を廻らして、元の座席に歸つてきた。と、見れば富木上人には、先程起きられたそのまゝに、端然と佛壇に

向つて掌を合せつ、半ば意識を失ひながらも、大衆の唱題に和して幽かに口を動かしながら、今や非滅現滅の大涅槃を示さるゝ時であつた。

かくして本化無邊行の再誕、富木日常上人には、最後に千載不磨の嚴誡を遺されて、終に寂滅無爲の雲に入られた。日頂上人は泣く泣く二十六日の茶毘、四月二日の御收骨まで、晝は終日夜は竟夜樹下に明し暮して、陰ながら父の御遺骸をお見送り申したのである。

上人は翌早朝、未だ曉の鐘の消えやらぬ頃、孤影悄然として遺品の小袖を身に締めながら、一人淋しく富士の裾野に向はれた。そして西も東も茫々たる重須の原に、蕭然たる一廬を結んで、こゝに十有餘年の陰の御奉公を遊ばされ、文保元年三月八日、六十六歳を以つて終に化を他界に遷されたのである。

由井ケ濱邊の苦修立誓

九日像上人

▲由井ケ濱邊の苦修立誓

曉方の散らな星も漸くその影を借めて、東天遙かに明るむ頃、日像上人は例もの如く海の中に苦しい修行の一夜を明かして、ヅブ濡れた白い單衣を冷たい朝の潮風に曝しながら、素足に由井ケ濱邊の小砂利を踏み〳〵、比企ケ谷の御庵室に歸つてゆく。

僅かに風雨を凌ぐ名計りの御庵室には、堅氷膚に結ぶ正月の嚴寒にも、せめて衣を乾かし身を暖むる火の氣とては何んにもない。唯だ室の正面に飾られた粗末な佛壇の直中に、老師の新しいお位牌のみが、神在すが如く白く目を射ばかり、總て室の中にはいつも死の如な冷さが流れてゐた。

今しも上人は、足を淨めて室に上がり、徐ろに潮に濡れた衣を更めて直に佛壇の前に拜跪し、專心經を誦することやゝ暫く、軈て所願成就の祈念を凝し終つて、さてヂッと老師の新しいお位牌を見詰めてゐた――と、涙は止め度もなく頰を傳つて、痛ましい老師御臨終の光景が、夢の如くに頭を衝いて浮んでくる。

弘安五年十月十一日！　池上右衞門大夫の舘には、老師の御病床を圍んで、日昭日朗日興日向等の上足を初め、富木太田四條池上等の檀越方、乃至歸依の信男信女に至るまで、悉く座を正して居並んでゐる。一座は水を撒つた如く濕つて、咳の聲さへ一つ聞えない。人々の顏には容易ならぬ憂愁の色を示して、今にも世の破滅を思しむるやう。此時老師には餘命既に幾何もなきことを知し召して、經一廻を枕邊近く召しよせられ、重き御頭を擡げ給ひて、右の手に三度まで經一廻の頂髮を撫で給ひつ

由井ケ濱邊の苦修立誓

「汝も今年は早や十四歳、今我が遺命をよく承れ。我建長五年夏の頃より、本地難思の妙法を弘通して、日本國の一切衆生を助けんと思ひ立ち、一期の間鎌倉殿に諫言すること三度、伊豆に三年佐渡に三年、住處を追はるゝこと二十餘度、その外或は打たれ或は切られて身命にも及びしこと數を知らず。されど幸にも佛天の加護によつて、大半其化を終ると雖も、未だ一天萬乘の君にその聲を觸れ奉らず、汝今より日朗を師と賴みて學門修行を勵み、驪ては華洛に登つて本化の妙法を天聽に達せよかし」

と、經一麿の小さい手を取つて、顏をさし覗き給へば、經一麿は幼心にも嬉しさ恐ろしさに言葉も出でず、唯だ老師の御手に小さい自分の手を任かせたまゝ髮を慄はしてヨ、とばかり泣き沈むのであつた。

あゝ不思議なる本地の因緣！　その側には學德辯才兼ね備つた上足の人々も澤山に居た。然るに是等の人々をさし置いて、特にこの雅兒姿の一小童に

帝都開敎の大任を囑望されたと云事は、思へば實に空恐ろしい冥加ではあるまいか。其身に餘る冥加を蒙つた一小童の經一麿こそ、實に今この日像自身であつたのである——

と、遙かに往事を追懷して千々に思ひを碎いてゐた日像上人、せきくる涙の目に、再び老師の御位碑を仰ぎ見れば、御位牌は唯だ嚴として言葉なく、無言の中に上人の努力を策勵するもの、如くであつた。

驪て上人は、涙を拭ひつゝ立ち上つて、破れ窓の際におかれた古い經机の前に端坐した。これより經文の細字の書寫を續られるのである。

今日の一日も暮れて、暮色の漸く窓際に迫つてくるころ、上人は一日の書寫にやゝ輕い疲勞を覺えて、やをら窓の障子を開けられた。見れば朝來の氣候はいつの間にか變つて、空はドンヨリ一面に搔き曇つてゐる。雪を含んだ冷たい風が、低く垂れた黑い雲の間から吹き颪してきて、冬枯れの木々の梢を鳴

してゆく。

「ア、今宵は雪にでもなるのであらう。日像が心を試すには、眞に屈竟の時である。假令、如何に風雪は激しくとも、その昔釋迦菩薩の六度の苦行を思ひ、今又吾が老師の一代の苦化を偲ばゞ、まだ〳〵日像の苦行は苦行にならぬのである。」

と、筆を收めて立ち上がつた上人は、この時快い決心の色を眉宇の間に漂はして、靜かに障子を閉められた。やがて形ばかりの夕餉を認め終るや、再び佛壇の前に拜跪して夕の看經を終り、更に衣を改めて、徐ろに時の移るを俟つてゐた。雪が降つてきたのであらう。寒さはまだ濡てゐる薄い單衣の行衣を通して刺すやうに身に迫つてくる。戸外には時々荒れ狂ふ風に吹きつけられて、雪の烈しく雨戸を鼓く音が聞えてゐる。

「百日の修行も、餘す處僅かに旬日足らず。然るに今この大風雪に逢ふこと、これ偏へに佛天の日像の心を試すの大慈大悲に外ならぬのである。老師は嘗て『極樂百年の修行は穢土一日の功德に及ばず』と示されてあるではないか。今宵一夜の修行こそ、今迄九旬の間の修行にも增して、キッと日像が心膽を練る事であらふ――」

と、やおら座を立つた日像上人、恭しく佛前に一禮して、例の如く跳足のまゝに庭に下り立ち

「我不愛身命、但惜無上道――」

と口ずさみながら、靜かに雨戸を繰り開けば、雪は風に亂れてサッと上人の顏を打つのであつた。此時上人は嚴かなる聲に

「妙法蓮華經如來壽量品第十六――」

と叫びつゝ、戸外に出ずるや雨戸を元の如くに締めおいて、軈て積る雪の明を賴りに、亂れ狂ふ風雪の中を象の如くに歩いてゆく。刻一刻、歩一歩、膚

は雪に刺されて腫れ上がるかと思ふばかり。讀むお經の聲も風に亂され雪に消されて、自分の耳にさへ杜切〳〵に、聞えてくる。

かくて漸く由井ケ濱に着いた上人は、そのまゝ風雪に身を曝しつゝ、鞳鞳闇の中に狂奔する海に向つて、渚に佇立することやゝ暫時、

「願くは吾が大願を成就せしめたまへ！」

と、專心默禱に思ひを凝して、更に經を誦しゆく中、一心欲見佛、不自惜身命」の句に至つて、一際聲を勵ましながら、渾身の勇を鼓して靜かに海の中に衝き進まれた。雪を溶かした冷たい潮は、身を切る如く脛より膝へ、股より腰へと、五體を次第に深く浸してゆく、上人はこの死の如ふな苦みをジッと耐え忍びつゝ、頓がて肩まで潮に浸し終るや、頸より上は徒らに風雪の打つに任かして、遙かに老師の神ゐます身延の方に向つて拿を合はせつ、一心不亂に誦經を續けてゐる——呪はれた如うな潮は、上人の頸を巡つて、その前

後左右に不氣味な黑い笑ひを湛えて無限に擴がつてる。時には吹雪に煽られた物凄い波が、大蛇の如くうねつてきて、上人を一呑みにするかと思はれる時もある。上人の五體は段々知覺を失つて、遂には冷熱の意識さへ判然せぬやうになつてしまつた。冷たい潮が、却つて身を熾くが如くにも思はれ、或は又百の鋭利な白刃を以つて、微塵に肉を裂き刻まれるやうにも思はれる——

降りしきる雪と、をやみなく吹く風と、渚に騷ぐ波の音とに、夜は次第に更けてゆく、眞夜中ごろには、上人の五體は全くこのまゝ海水の爲めに凍え閉ぢられるかと思ふばかり、讀むお經の聲も糸の如くに細りゆいて、恐ろしい死の影が、犇々と上人の身邊に迫つて來た。

けれども上人は遂に無事でのつた。その胸底にひそむ灼熱せる信仰の靈火をば、何物も之を奪ふことが出來なかつたのである。上人はかくして一夜風雪にたゝかれ、冷たい潮に搖られながらも、聊かも調子亂さず久遠偈百遍と

唱題數萬遍とを繰り返して、偖、夜の引き明け方

「願くは日像が苦行の心を憐んで、速かに帝都開敎の大任を成就せしめ給へ」

と、念ひを凝らして回向を終り、半ば喪心せる者の如く、蹌踉として海の中を立ち出でられた。

永仁二年二月の二日！　今日は百日の間の苦しい海行も恙なく玆に終りを告げて、前途に赫々たる希望の耀き初めた、その嬉しい滿願の當日である。

この日空は拭つた如く晴れ渡つて、御庵室の側りには、朝から暖かい日の光を浴びながら、小鳥の樂しく囀り交はす聲が聞えてゐた。今まで酷しい冬に閉ぢ込められてゐた柔かい春の氣分が、何處からともなく湧き出でゝ、麗かな天地に擴がつてゆく。上人は夜になると、例もの如く御庵室を立ち出でゝ、折から山の端に覗き出た月の光に道を急ぎながら、やがて由井ヶ濱邊に辿り着いた。

渚に立つて遙かに前方を折ち見やれば、沖は月の光にホノ白く霞んで恰も夢のやう。その霞の中から果しもない海がキラ〳〵と續いて、すぐ自分の脚下にまでうねつてゐる。空には無數の星が奇麗に耀ひて、生きておるかの如く、皆一樣に瞬きをしてゐる、左右には押しては返す波の頭が白く月に碎けて、白蛇の如く長く〳〵續いてゐた。上人は堪え切れぬ歡喜の情に心を躍らせながら、聲高らかに久遠偈の文を唱へつゝ、靜かに全身を海の中に浸した。今宵とて幸ひ雪や風こそなけれ、潮は矢張り身を切る如くに冷たかつた。

長い夜も段々更けゆいて、空には頻りに星の飛び交はす頃、上人は經文の讀誦を漸く終つて、今や唱題に移らふとする時、不思議にもフト海水の暖くなるのを感じた――と、潮はそれより次第に溫度を增してきて、身は恰かも浴槽の中に浸つておるやう。今まで固く凍えてゐた五體は、急にほぐれて、血潮のめぐる響さへ心地よげに感ぜられる。上人は今親りこの驚くべき不思

議に遭遇して、夢かとばかり打ち驚き、思はず感謝の涙をハラ〳〵と滾して「數ならぬ日像が苦衷を憐んで、かくまで感應ます上からは、大願成就も必ず疑ひなきことであらふ。あゝ難有や、無南妙法蓮華經！」と、尙も一心罩めて唱題を續くる中、やがて夜はホノ〳〵と明け渡つて、海の彼方よりは、目覺むる如き眞紅の日が海一面に朝の光を投げ初めた。

上人は海より上がるや、先づ日天子に向つて法味を捧ぐることやゝ暫く、茲に百日間の苦行を成就して、感謝と歡喜の情に躍る胸を抑へながら、爽かな朝の空氣を呼吸しつゝ、御庵室指して歸つてゆく。

あゝ如斯き海中に於ける嚴冬百日間の苦行！　そもこれは何の爲めであらふか。畢竟するに是れ一切衆生を援けんが爲めの大慈大悲に外ならぬ。抑々末法五濁の世にあつて、假令ひ一句たりとも多怨難信の法華經を弘むるならば、忽ちに三類の强敵に責め寄せらるゝこと、恰も影の身に添ふが如くである。

老師の御一生こそ實にその好適例と言はねばならぬ。然るに今上人が、親しく老師の御病床に御遺命を蒙つた帝都開敎の大任を果すに當つて、旗鼓堂々、馬を陣頭に進めて法戰これ努むる時、忽ちに起る三類の强敵に責められて、或はその鋒先の鈍ることもあらんには、上は老師の御遺命に背き、下は衆生化益の功を缺くことになる。以爰上人は豫め此等の敵に備ふべく、先づ充分に忍耐力を養はねばならぬと決心した。そしてその決心の發露は、遂に聖人の廿五歲といふ永仁元年十月廿六日より百日間、特に嚴冬烈寒の候を撰んで、晝は細字の書寫をなし、夜は由井ヶ濱の荒波に全身を涵してその心膽を練ることになつたのである。

翌くれば永仁二年、今年はハヤ老師の十三回忌である。上人はこの年の二月二日無事百日間の苦行を終つて、翌三月、獅子王の如き大決心を以つて遂に京都に旅立たれた。けれども行く先きは雨か雹か、法敵と戰ふ身は更に生

山井ヶ濱邊の苦修立誓

死の程も判らない。故に上人は先づ御師日朗上人を池上に訪ねて別れを告げ、それより房州に遊んで親しく老師誕生の靈蹟を拜し、或は清澄山に攀ぢてその舊房に昔を偲び、更に小松原を過ぎては勸持色讀の靈地に涙を拭い、歸つて龍の口を經て伊豆の伊東に到り、即時踵を廻らして直に身延山に詣でゝ祖塔を拜すること七晝夜、爾後道を北に取つて佐渡謫居の蹤を訪ねんとして身北越の危險を冒し、四月愈々京都に着して、茲に初めて一大素懷を展ぶるの期に到達した。

上人は京都に入るや、四月廿八日の吉祥辰に、直に老師自刻像の御頸を奉じて帝闕日の御門に到り、東天遙かに旭日の昇る時、聲高らかに御題目を唱へて、これを以つて帝都開教の式となされた。以後上人の御一生は悉く是れ血と涙の歴史であつて、恰かも老師當年の面影を偲ばしむるものがあつた。けれ共嚴冬百日間、由井ヶ濱の海中に錬へ上げた上人の心は、如何なる迫害にもひるむことなく、到處に宗敵法戰を交へて具さに三黜三赦の法功を積み、遂によく關西の教光を揚ぐることを得たのである。

一〇　熱原神四郎國重

▲一箭一唱血涙痕

茲は駿州岩本實相寺の奥まりたる一室――

主客は先程より何か頻りに聲を殺しながら、ヒソ〳〵と密談に耽つてゐる。主人は年頃五十七八の、見るから執拗な顔容をした當實相寺の住持、二位律師嚴譽といふ權僧。客はやつと五十の坂に手の屆いたかと思はれる大兵肥滿の惡僧、名を行智といつて直ぐ附近の加島瀧泉寺の住職である。

一と時、隨身の小坊主が茶を入れ替え、菓子を進めて出て行つた後、客は徐ろに言葉を續いでいふ

「全く御身の言はるゝ通り。この儘捨て置く時には、それこそ由々しき一大事既に拙寺に於ては行末最も望を屬してゐた日秀日辨等も、遂々彼等の一味に加つて、今では盛んに念佛無間を振り廻してゐるとの話でムる」

「いや、そのこと〳〵。拙寺の學衆の中にも、什麽も日蓮が法門に内々心を寄せ居るものもあるやうに見受けられる。のみならず大事の檀越まで、一人行き二人行きして、はや七八人も彼等の仲間に加つた樣子である」

「お互に根據を拔き取られるのは、あまりよい氣持も致しませぬ――」

と、客は大きく笑つて身體を動かした。主人もつい釣り込まれて苦笑ひする。と、客は急に眞顏にかへつて

「何に致せ、眞向から法門の對決では、お恥しい話ではあるが、到底彼等には及ばぬ故、何とか玆に事を構へて、彼等を陷れる工夫はムるまいか」

「成程、それは善い處へお氣がつかれた。……してその工夫といふは？」

「さればなり――と」客は勿體らしく頸を一つ捻つて「それには先づ第一、彼等の筆頭たる神四郎を葬らねばならぬと思ふが如何でムらう。すりやその餘の者は、自ら四散することであらうと思はれる」

「如何にもその通り」

「それには先づ事の始めとして兩寺の檀越共を煽動いたし、途中彼等の誰彼を問はず、逢えば之に喧嘩を吹き掛けさせる。彼等とて衆人環視の中で恥かしめられては無言つてゐやう筈もなく、二言三言互に言葉を交す中、事は次第に大きくなりゆいて、遂には地頭のお耳にも入ること、それには幸ひ地頭は厚い念佛の信者ゆゑ、日頃彼等を心善からず思てゐる矢先なれば、何んとか巧くそれに取り入つて、種々彼等を惡しざまに申し立て、又一方には、日蓮が當面の敵たる内管領平左衞門尉頼綱殿に之を訴へ出でゝ、公儀の裁決を仰いだなら、事の成就は火を睹るよりも明かなることでムりませう」

一箭一唱血涙痕

「ホ、ー、それは誠に以て近頃の名案、したが裁決には凡て證據の要ること、それには貴僧如何なさるゝ御所存なるや」

と、主人はやゝ膝を進める。客は落着き拂つて手に掛けた數珠を弄びながら

「それに就ては貴僧も知らるゝ通りあの彌藤次入道、彼は神四郎の實の兄なれども、弟の日蓮が信者となりしを痛く憎んで、今では兄弟犬猿も啻ならざる間柄とのこと、それ故幸ひ彼を誘ひ出して味方に引き入れ、若し萬一の時の生證人ともなすならば、これより確い證據はムりますまい」

「いや貴僧の言はるゝところ一々道理、然らば善は急げとやら、早速使の者を遣はして、彼を此處へ呼び寄せては如何でムらう」

「さればさ、然し事は可成機密に屬するを以つて尊しとする。それに拙寺に於ても又御當寺に於ても、學衆中に内々彼等に心を寄するものがあるとすれば、尚ほ以つて機密に事を運ばねばならぬ。マ、、總てのことは一切この行智にお任せ下されたし。行智誓つて手ぬかりはいたしませぬ」

「成程貴僧は如斯な事には手達錬の老巧者、然らば萬事貴僧にお任かせ申すでムらう」

話が終ると、主客は互に會心の笑みを交換する。軈て主人は隨身の者を呼んで、客に何か馳走を進むるやう命令した。

行智が醉歩蹣跚として、微薫を帶びた赭い顔を、實相寺の門外に現はしたのは、それから暫時經つてからのことであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

加島の鄕には、この頃不思議にも念佛信者と神四郎一派の日蓮信者との間に、諍論葛藤が絶え間なく起るやうになつて來た。彼等は家庭を揚げて相反目するのみならず、途上擦違ふにも相顧て互に眦を裂く。そして遂には

事に托して口論を搆へ、更に進んでは拳を固め、偖は刀にも及ばふとする時もあるが、恁ういふ時には、喧嘩の賣手はいつも念佛信者に在つて、神四郎一派の日蓮信者は、寧ろ之を避けたいと希望するものゝ如くに見えた。唯だ餘儀ない時にのみ僅かに之に應戰する。蓋し同じ法の爲めに殉するにせよ、自ら死には、時と場處とのあることを自覺しておるからである。

これはホンの一例に過ぎぬが、或晩のこと、日秀日辨の二人が神四郎を訪ねての歸るさ、今宵主人との對話の數々、互に之を繰り返しながら、今しも漸く家並疎らな原道に差し蒐らふとする頃、不意に物陰より躍り出でた念佛信者の五六人、忽ち二人の前に立ち塞がつて

「謀反人日秀日辨暫く俟て！」と聲を揃えて罵つた。と、聽がてその中の一人は鹿爪らしく肩を怒らして進み出で

「汝等二人はその初め瀧泉寺に人となりながら、阿彌陀如來の御恩をも打ち

忘れて、今は却つてその怨敵たる神四郎一派の日蓮信者に欵を通じおるとのこと、眞に以て見下げ果てたる性根なり。獅子身中の蟲とは眞に汝等が如きものを云ふのであらう。されど今玆に於て先非を悔ゐ、その手に持つ法華の數珠を絶ち切つて、再び元の念佛に立ち歸らばよし、若し不服して兎や角ふ言を返すならば、イッカナこの道は罷り通さぬ、イザ返事を聞かん」

と、威猛々に詰め寄つた。

この時日秀少しも騷がず

「こは思ひも掛けざる怪かる振舞、その上又理非をも辨けざる粗忽の難題、日秀日辨は法門の爲めにこそ問答はすれ、かゝる問には答ふる要を認め侍らぬ。そこ去き給へ！」

と、道を開いて日辨を促がせば、日辨はたゞ唯々として微笑ながら之に從ふ。

すると先きの念佛信者は、カッと怒つて電光の如く眉を動かし、ムヅと日秀の腕を捉へて、聲荒らげ。

「おゝ善う云ふた青道心！　所望とあれば法門の對手も致して取らそう。したが自宗を裏切り師を棄てし、犬猫同様の汝等反逆者には、法門は愚か世間の道理も解るまい。それよりはおとなしく、我等が言に從つて、疾く元の念佛に歸るこそ、却つて汝等が爲めなるべし」

と、言ふをも俟たず日秀キッとなり

「汝今、猥りに我等を指して反逆者と呼びなすと雖も、若し我等にして眞に反逆者ならば、その昔惜み狂ふ父母妻子を捨てゝ遠く檀特山に入り給ひし達多太子も亦反逆者なるべきか。近くは又日蓮上人が清澄山に考師を捨てゝ、別に一宗を開き給ひしも、これ又反逆者と云はるべきや。是等は皆これ恩を捨てゝ却つて恩を報ずる大孝の人なるぞかし。我等今幸ひに宿福あつて、翻然念佛無明の夢より覺めて、茲に本地一乘の妙法に歸することを得たること、一往先師及び汝等を捨つるが如く見ゆると雖も、これ軈ては先師及び汝等を救ふ所以なることを知らざるか。日秀目辨は、汝等が捨邪歸正の遲きを寧ろ憐むものなり。

と、言い放つて、再び道を開かふとする。

これを聞いた念佛の信者等は、怒り心頭に徹して自と握る拳を固め

「この汝れ反逆者！　言はして置けばツベコベと、人をも恐れず惡罵きおる。阿彌陀如來の現罰は、コレこの通り觀念せよ！」

と、いふが早いか彼等の拳はヤ日秀目辨の頭上に、急霰の如くに降り注いだ。そして彼等は、軈て其處に横つた二人の射軀に、冷かな一瞥を殘したまゝ、何處ともなく消ゆるが如く立ち去てしまつたのである。

こういふことは、その外到る處に續發した。そして遂にはそれが加島の鄕

を中心として、その近在一圓に迄行はれるやうになつてしまつた。

是等の事實を見て、心密かに喜んだのは嚴譽と行智とである。彼等はその後再び實相寺の奥に相會して

「如何にも貴僧の御名案には、拙僧唯々感服いたしてゐる。」

と、嚴譽が云へば

「否々、これと云ふのも、皆これ阿彌陀如來の加被力によること、決して拙僧の力ではゐらぬ」

と、行智が強と謙遜する。

「して、彌藤次入道の方は如何なされしか？」

「それは決して御掛念召さるな。この行智疾うに彼をば味方に引き入てゐりまする。それに既に記訴の手續きをも致しあれば、追つては御沙汰も座りませう」

「ホ、ー、それは誠に早いこと、この上とも萬事は何分貴僧にお願ひ申す。拙僧もこれにて安心いたしましてゐる」

「及ばずながら、法の爲めキツと力を致すことでゐりませう」

二人はこれで別れた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

加島瀧泉寺裏手つゞきの大廣場。向ふ正面には内管領平左衞門尉頼綱、及びその一子飯沼判官とて今年僅かに十三歳になる少年の二人、共に床几に腰打ち掛けながら嚴として控えてゐる。その後方及び左側には頼綱の家來十四五人計り、右側には實相寺の嚴譽、瀧泉寺の行智、神四郎の兄彌藤次入道など、その外兩寺の檀越の重立たるもの十七八人計り、何れも皆容易ならぬ面容をして、ズツと居流れてゐる。廣場の右手には、松の大樹が一本高く天に聳えて、その左手にある二本の雌松は、風に誘はれては互に悲壯な調べを交

してゐる。廣場の下手正面には、神四郎國重を初め、弟の彌次郎、彌五郎、及びその外二十餘人の日蓮信者等が、身を縛められたまゝ、皆一樣に此方へ背を向けて一列に居並んでゐる。

先程より頼綱は、神四郎に對つて嚴しい糺彈に種々無實の誣罰を數へたが、神四郎はじめ二十餘人の如何にも條理明晰なる陳述に、陷れん樣もない處から、遂に最後の伏罪條件として、聲一際打ち張り上げ

「汝等先程より兎や角ふ言を左右に托して、巧みに公庭を欺かんとするの條、返す〳〵も不屈至極なり。されど汝等如何に公威を蔑ると雖も、現在事實の證據をば、之を誣ふること能はざるべし。いざ我が最後の判決をよく承れ」

と、扇子を以つて彌藤次入道を指招けば、先程より味方の氣色の振はぬのに、頻りに氣を焦つてゐた彌藤次入道、身神四郎等が實の兄にてありながら、宗旨の邪正に目も暗みて、遂に惡人原に方人をなし、日頃深く弟等の日蓮に親

むを心善からず思つてゐた矢先なれば、玆ぞと計り躍り立ち、ハッと頼綱の前に膝まづいて平身低頭する。

この時頼綱、やゝ聲を和げて彌藤次に打向ひ

「彌藤次、其方は神四郎等が實の兄なれば、定めし彼等が日頃の行狀を知ることであらふ。今玆に於て逐一それを申し立てえ」

と、命令する。

「ハ、ッ、委細承知仕りまして厶る」

軈て彌藤次は神四郎等の方に向き直つて、唾を一つコクリと嚥み下しながら

「如何に神四郎始め彌次郎彌五郎、汝等は皆是れ我が實の弟にてありながら、如何なる天魔に魅られたか、この兄とは心違つて頻りに日蓮が邪宗に魂を拔かし、日頃この兄の戒めをも聽かずして、鎌倉殿御一門の信仰ある念佛宗に

向つて無間墮獄の詈罵讒謗、それのみならずこの頃にては、又この加島の郷に同臭の者を打ち語らひ、到る處念佛宗徒に難題を試み、果ては法論に敗けたるを深く根に持つて、亂暴狼籍にも及ひしこと數々、その度毎この兄は、汝等の淺ましい所行を見て、人知れず法衣の袖を絞つたのである。然るに汝等今この期に及んでも更に前非を後悔する色もなく、却つて兎角の言辭を弄じて猥りに公庭を欺かんとする不敵の振舞、この兄もホト〳〵慌れて物も言へざる仕末なり。したが神四郎、今兄が斯うして生證人となるからには、最早や迚も逃れぬ罪なれば、早々法に服して逐一今迄の罪科を白狀なし、然して神妙に公儀の命を待ち奉るこそ、却つて汝等が爲めなるべし」

と、刺を含んだ親切ごかし。之を聞いた神四郎、兩眼より涙をハラハラと流して

「あゝ如何に濁末の世なればとて、兄弟互に公庭に論を爭ふこと、思へば眞

とに淺ましい次第である。されど事こゝに至つて徒らに口を緘むは、却つて御師聖人に傷をつけ、尚又法華經をも下すの道理、不憫なれど暫く兄が邪を打ち碎ひて、正道の曲ぐべからざることを知しめ呉ん」

と、やをら頭を上げて說き出す陳述の條々、道理整然として一絲亂れず。是非分明なる應答に、詰め寄る彌藤次の鋒先いつしか鈍つて、遂には言葉もしどろに口塞がり、色さへ漸く土色を帶びて見えた時、早くもこの體を見て取つた平左衞門、ムカ腹立つたる聲荒らげ

「彌藤次入道、座に復つて宜しからう」

と、後目にキット彌藤次の横顏を睨めつける。彌藤次は夢の如くに立ち上がつて、ホット吐息を吐きながら、悄々と元の座席に歸つてゆく。嚴譽と行智とは、この彌藤次の腑甲斐ない有樣を見て、齒嚙みをなして口惜んだ。けれども今は早や刀折れ矢盡きた後のことゝて、何の施す術もない。

平左衞門尉頼綱、この時ツト床几を蹶つて立ち上がつた。見れば眉は騰がり眦裂けて、鼻息さへ例になく荒々しい。先程より味方の振はぬのに氣を焦つて、渾身の血潮が一時に狂ひ出したのであらふ。聲を震はして猛り詈つた。

「ヤア〳〵如何に神四郎始め二十餘名の者共等！　汝等愁ひに在家の分齊として徒らに宗旨法門の詮義立、それが爲めいらぬ大事を惹起して猥りに近隣を騒がすこと、尤も片腹痛きことゞもなり。理の邪正は暫く置くも、事の起りは一向に汝等が罪に在りと云ふべし。然るに汝等之を覺らずして尚も言葉巧みに公庭を欺かんとする、罪愈死に勝れり。されど今、汝等先非を後悔して、眞に法華を捨てゝ念佛に歸する心のあるならば、この頼綱、阿彌陀如來のお慈悲に免じて、隨分汝等が罪をも許し遣はすべし。如何に神四郎、イザ疾く返事を聞かん」

と、居丈高になる。

神四郎等、靜かに聲をそろへて云ふ。

「こは不審しきことを聞ものかな。事の起りは元とこれ讒人の虚構に基きしもの、我等露ほども身に覺えなし。その上事の邪正も公庭に判明しぬれば、粗忽をわびてこそ我等を仂り還すべきに、筋違ひなる改宗難題！　たとひ一日本國の位をゆづらん。法華經を棄てゝ觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずばなんどの種々の大難出來すとも、智者に裁義破られずば用ひじ――とは、吾師日蓮上人の嚴訓なり。さるを今、僅かの小島の主等が怖じ嚇さんに恐れては、閻魔王の責をば如何に堪ゆべきや。命にかけて信し參らせたる法華經なれば、命召さるゝとも捨て候ふべからず」

と、山の如くに動かない。

これを聞いた平左衞門、怒氣心頭に徹して、思はず刀の柄に兩手を掛け

「おのれ僧くき惡口雑言、さほど命が捨てたくは、望みにまかせて息の根止

めん」

と、我を忘れて二三歩前に踏み出したが、フト思ひ返して考へたのは、悲壯極まる嬲殺しの慘刑！　彼は直に左右に命じて神四郎を松の大樹に縛り括るやう言つた。

この嚴しい、性急な命令に、左右の者共七八人、忽ち神四郎を取り圍んで繩を引き締め追ひ立て行き、軈て廣場の右手にある松の大樹に酷たらしくも箭頃高に縛り上げた。

と、この有態を見た平左衞門、血の如き笑みを兩の頰に浮べて、側にゐる一子飯沼判官を顧みた。

「如何に判官、汝今この罪人を射殺さずや」

と、云はれて判官小童心にも打ち喜び

「畏りまして厶る」

と、早速お請して父の御前を引き退き、手早く襷鉢卷に身を堅め、甲斐〳〵しく袴の裾を打ち端折つて、郎黨に弓矢を持たせ、小さな肩を怒らしながら、再び父の御前にまかり出た。

「仕度いたしまして厶る」

「天晴〳〵、早々彼を嬲り射よ」

「ハハッ」

と、喜び勇んだ飯沼判官、今迄は稚遊びに雀蜻蛉を追ふてゐた身の、今日は一躍して晴れの舞臺に人の身を射ること、如何にも一角の功名にてもなすが如く思ひなし、いそ〳〵と射處定めて、遙かに神四郎をキッと睨まへ、頓て身構へに及ぶや、弓に矢をはげて滿月の如くに引絞る。神四郎の運命こそ、實に風前一穗の灯であつた。

と、この時平左衞門尉頼綱、大音揚げて神四郎に打ち向ひ

一箭一唱血涙痕

「やよ神四郎、汝ぢ如何に强情我慢を張り通すと雖も、今は只だこれ屠所の羊輙の鮒、今にして尙先非を改めずんば、天箭立ちどころに汝が胸底を貫くべし。かくても尙ほ汝念佛を申さずや！」

と、詈る聲に應じて神四郎、身は松の大樹に縛せらるゝも、覺悟の體少しもわろびれず

「さても左衞門尉殿の執拗さよ。我一たび身命を法華經に奉り、人の爲め國の爲め、求めて無上の道に入れる身の、たとへ如何なる毒矢に身を刺さゝるとも、爭でか法華經の金剛信を破らんや。あら嬉しや、今法華經の爲め嗅き頭を刎らるゝは、恰も糞に米を代え、石に玉を貿へるも同じ――いかに强敵重なるとも、努々退く心なく恐る心なかれ、縱ひ頸をば鋸にて引き切り、胴をば稜鋒を以てつゝき、足にはほだしを打ちて錐を以て捫むとも、命の通はん程は南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死に死せよ――とは、吾師大

聖人の嚴誡なり。然らば――釋迦多寶十方の諸佛は靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來つて手を取り肩に引つかけて靈山へ走り給ひ、二聖二天十羅殺女は受持の者を擁護し、諸天善神は蓋を指し幡を揚て、我等を守護して確かに寂光の寶刹へ送り給ふ――こと疑ひなし。不憫なる哉、汝等その時阿鼻大城の底に沈みて大苦に値はんことよ。いざ射て殺せ、吾血肉は裂かるゝとも、吾心は死す可からず。最後の梵音、耳傾けて拜聽せよ。南無妙法蓮華經！」

と、大音聲に唱へ出せば、同士の面々二十餘人も、聲を限りに

「南無妙法蓮華經！」

と之に和する。

「えゝ、憎さも憎し日蓮原！　聞く耳持たぬわ、それ疾く射よッ！」

と、激しき下知の下、判官心得たりと、ハッシとばかり切つて放てば、矢は

一箭一唱血涙痕

電光の如く弦を放れて、神四郎が胸元深くグザと刺し透した。サッと迸走る鮮血は、見る〳〵神四郎の身體を紅に包んで、餘滴淋漓としてあたりの千草を染めるのであつた。と見るや、人の肺腑を突き刺す如き神四郎が唱題の聲！血を絞るやうな悲調を帶て

「南無妙法蓮華經！」

と、秋の空林を掠めて、遠く空に響き渡つた。これを見た弟の彌次郎彌五郎、我にもあらずつッ立ち上がり、兩手を後ろに、身を縛められたるまゝ、轉びつ起つ兄の足下に走り寄り

「えゝ痛はしや、兄上！」

と、無念の齒ぎしり喰ひ締つゝ、涙に微む目を上げて、チッと兄の顏を差し仰げば、神四郎湧きくる涙を推し隱して

「如何に弟彌次郎彌五郎、これ程の喜びをば何故に泣く。——二陣三陣續いて迦葉阿難にも勝れ、天台傳敎にも越えよかしとは、御師大聖人の御遺誡ならずや。幸なるかな、今法華經の爲めに嗅きこの身を捨てんことよ。嚮ては靈山淨土に、御師聖人に對面して二陣三陣續き、功を誇らん時も近きにあり。續け！　見苦き振舞して敵になる笑はれそ！」

と、下見おろして顏と顏、互に見交はす折しもあれ、又もや判官の切つて放ちし第二の矢は、あはれや再び神四郎の胸元深くグザと刺し透した。サッと散る血潮！　それを浴びた弟彌次郎彌五郎の顏！　帛裂く如き神四郎が唱題の聲！　之に和する同士二十餘人の御題目！　彌藤次の喚く聲！　嚴譽行智の詈る聲！

「判官手緩し、續いて射よ」

と賴綱の命！　騷然たる喧轟の中を又しても第三の矢は、空を切つて神四郎が胸元深く衝き刺された。

一箭一唱血涙痕

かくて神四郎は、判官が輿に乗じて射續くる箭に、一箭ごとに壯烈なる聲振り絞つて

「南無妙法蓮華經！」

と唱へてゐたが、あはれその聲も一度は一度より弱く細つて、遂に第七本目の箭に至つて息絶えてしまつた。次いで彌次郎彌五郎の二人も殺され、その餘の者は悉く入牢の身となつた。

あゝ、この慘虐！　誰れか之を見之を聞いて泣かぬものがあらう。法敵の殘忍その極に達して、志士の壯烈いよ〳〵その光を增す。神四郎こそ眞に祖命を辱かしめぬ如說修行の行者と云はねばならぬ。之に反して、此の慘刑を敢てせる賴綱は、後謀反の罪によつて、つひに父子共に殺されてしまつた。

二日親上人

▲血潮煙る燒鐺の慘刑

「日親坊、御上意なるぞ！」

雲の降りしきる二月の寒いある晩のこと、太い樫の棒を銜いた一人の牢守が、突然牢の入口に立つてこう叫んだ。

「何、御上意とな、何御用なるか？」

上人は薄暗い牢の奥にこう答へて、軈て入口の窓際に恭しく兩手を銜いた。

「詮議の件あれば、早々牢外に出られよとの御仰せ――」

「ホ、ソ！」と上人は輕く頭を下げて「承知いたしましてムる」

とそのまゝ牢守の開いてくれた窓を、やゝあつて靜かに窓外へ出た。

窓外は今朝からお止みなく降る雪に、一面白妙の銀世界をなしてゐた。綿を積み重ねたやうな木々の梢の間には、細かい雪が夜目にも明るく煙つて丁度夢のやう。牢の左手にある牢守の番小屋からは、焚火の暖かそうな火影が、眞啣に戸の隙間を洩れてゐた。

雪明りに、密つと窓外に立つ上人の風姿を透かし見れば、鮫龍の恰も深淵に潜むが如き一大風格！　眼は悶々として日月の如く、頰豊かに、口大にして見るから霧を呼び雲を起すの概を示してゐる。上人はサッと打ちつける吹雪に、眉の根一つ動かさず、魏然と面を吹雪に委せながら、僅かに白衣の袷一枚に身を包んで、暫く窓の外際に上意の下るを待つてゐた。と、そこに立つてゐた先程の牢守のした合圖に、急に番小屋の戸が荒々しく開けられて、その中から四五人の同じ牢守が、これも同じ樫の太い棒を小脇に抱えながら、雪を蹶立つてやつて來た。この時上人は「さてもいつもに似ぬ物々しさ」と心の中

に怪しみながら、フト彼等の顏を見廻はせば、その中には不思議にも、物具着けた一人の武士さへも雜つてゐた。するとその武士は、突然上人の耳朶を破つて

「御上意なるぞ、神妙に致せ！」

と矢庭に上人をそこへ引き据えて

「早うこの者に繩を打て！」

と牢守共を叱咤した。

上人は無言のまゝ、暫く彼等に身を任せてゐたが、軈て繩をうち終るや

「詮議の件あればとの御上意なるに、何故なれば理不盡にもこの縛め、かゝる御政道なればこそ、國に正義行はれずして、世は益々麻の如く亂れるのでムりまする。日親これにつけても上御一人の一時も早やう、執權の夢より覺めて、國に謗法の聲を斷やさしむるやう、吳々も願はしう存じまする」

と痛むが如く、人々の顏を打ち見守つた。

「嘿れ、身の程知らぬ靑道心奴が！　それよりは汝こそ、早々轉我邪心して、彌陀の稱號を唱ふるこそ、却つて汝の爲めなるわッ！」

と例の武士は、ハッタと上人の顏を打ち睨んで、軈て上人を素裸身にしたまゝ、牢の側らにある梅の大樹に縛り括るやう、牢守共に命令した。上人は遂に荒くれた牢守共の手によつて見る〳〵中に十重二十重、棘々しい梅の大樹に縛り付けられてしまつたのである。

上人がかく、入牢の身となつて、色々のあらぬ艱苦に身を刻まるゝ原因を尋ぬるに、その最初、上人は宗祖の滅後一百廿六年を以つて、上總の國埴谷の鄕に孤々の聲を揚げ、幼にして同じ鄕の妙宣寺に入つて權大僧都日英を師とし、後應永廿七年十四歲の時、自ら下總の國正中山に尋ねゆいて、時の貫主日運上人について得度し、それより應永三十四年の春、洛陽一條戾橋の

側りに立つて盛んに法鼓を鳴すまで八年の間、止暇斷眠、晝はひねもす夜は夜もすがら、只管經釋を學び法理を磨いて讚仰倦むことなく、弱年の身を以つて遂によく一代の學匠となり、世出二法の淺深は勿論、自宗他宗の勝劣邪正に至るまで、悉く胸に浮べて恰も鏡を見るが如く、玆に自行漸く滿じて遂に廿一歲の春、蹶然意を決して洛陽に法幢を翻したるを手初めに、或は九州に降り關東に來つて專心不惜身命の化を布かれたのである。

けれども最後に、謗法の禍根は天下の主權者その人の邪正にあることを觀破された上人は、永享十一年、年三十三歲の時、時の征夷大將軍源義敎に向つて、遂に死身弘法の大國諫を試られたのである。するとこの時、義敎大に怒つて云ふやう

「汝天下の制禁を顧みず、猥りに我に向つて宗旨法門の諫言立、このたびのみは一應許し遣はすも、再びかゝる不敬をなすに於ては、キット重き刑罰に

行ふべし」

と、以ての外の御不興、上人之を聞いて靜かに襟を正し

「我幸にして法の臣下と生れし身の、たとひ如何なる公命たりとも、之を恐れていかでか法王の宣旨に違ひませう。又重ねて訴へん時、嚴しい責苦にも及ばうなら、その時こそは師子尊者、法道三藏の跡を偲んで、吾師日蓮大聖人の軌を躡みまする計り。露の世に、拙きこの身を法華經に奉つて、大法を後代に留めんこと日親が一期の願ひに厶りまする」

と言葉を殘して御前を引き下がつた。

その後上人は、義敎の亡父、麓園院義滿の三十三回忌の時、その追善にことよせて、再び義敎に大國諫を試みやうとした。そして宗祖の立正安國論になぞらへて、立正治國論なるもの一卷を綴り、密かに機の至るを待つてゐたのである。

然るに早くもこのことを傳へ聞いた禪念佛等の權僧原は、好機逸すべからずとなし、種々なる讒言を構へて之を義敎に訴へた。義敎は元より如來の敎法に於て顯密構實の別あることを知らず、勝劣邪正の辨へもない。忽ち虛構の讒言を信じて、烈火の如く憤り、永享十二年二月六日、遂に上人を召し捕つて、之を獄屋に投じてしまつたのである。

今、その獄屋の有樣を見るに、高さ四尺五寸、廣さ四疊を敷いて、天井からは逆まに七八寸計りの釘をあまた打ち下ろしてある。初めは三十六人この牢に投じてあつたのを、牢守の計ひによつて、その中の廿八人を他の廣い牢に移し遣はしたが、殘る八人とて、屈伸更に自由ならず、その上餓と寒さに五體は漸次瘦せ衰へて、頭髮も垢にまかせたまゝ、宛然、此世に於ける、生きながらの地獄であつた。

丁度その年の眞夏のこと、上人は燒付くやうな炎天に、今の如く一度獄屋

の庭に引き出されて、山の如うに積み重ねた薪火に、終日立ち向はせられて火あぶりの刑にあつたことがある。その時にも一人の官人は目を瞋してこう詈つた。

「汝、かくても猶念佛申さゞるか、苦しみ忍び難くば、早々法華を捨てゝ彌陀の名號を唱ふべし」

と、上人は滿身火を帶びて、瀧なす汗を流しながらも、顏さへ一つ外向けず

「暑さ眞とに忍び難し、されど謗法の罪によつて、大焦熱の焰に焦さるゝよりは、遙かに堪え易ふ覺えまする。なんぞ暫時の熱惱を厭ふて、永き世の苦しみの種子を植ゑませう」

と聲高らかに御題目を唱へられてゐた。

しかるに今はそれと事變つて、この雪の降る極寒の夕、素裸身のまゝ梅の大樹に縛りつけられた上人は、其夜一夜を降り積む雪に埋められて五體に泌

み渡る寒さをヂッと堪えつゝ、力任せに引き締められた繩目の痛さと、梅の木の棘々しい痛さとに肉を破り血を流しながら、一心强盛に唱題を續けてゐたのである。

明けにくい冬の夜も、漸くホノボノと明け渡つて、曉方の鐘の音の、あたりの木々に響き渡つて、梢に積む雪を搖ぎ落す頃には、上人の血潮は半ば凍えて、身は雪の如く白く變つてゐた。

同じ雪の夜一夜を、紅閨翠帳の中多くの美姫に擁せられて、圓かな夢に厭いた義敎は、フト曉方の鐘に目を覺まして、やをら臥戸を立ち出でられ、昨夜の首尾や如何にと、そのまゝ從者二三人を引き連れて、雪を踏みながら靜かに上人の眼の前に顯はれた。

「いかに日親」と、義敎は如何にも憎さ氣に上人を呼びかけて「彌陀の現罰嘸かしシカと身にこたへたことであらう汝かくても念佛申さゞるや」

と杖もて雪に埋もるゝ上人の頬を打抉ぐつた。此時上人カッと目を見開き

「仰の如く寒苦まことに堪え難し、されど邪師邪法を信受して、八寒地獄の底に沈み、大紅蓮の氷に閉ざゝるゝに比ぶれば、如何ばかりか心易ふ覺ゑまする。なんぞ露の世に、僅かの寒苦を厭ふて、未來永々劫の苦の種子を植ゑませう」

と泰然自若として、正面に義敎の顏をキッと見据えられた。

すると義敎は、直に例の荒々しい氣性を發揮して

「汝いかに高言を吐くと雖も、現在汝が身の、寒苦の爲めに震ひおるは何故ぞや。自ら法華經の行者と名宣りながら、何に恐れて斯くは震ふぞ」

と今度は胸の邊りをしたゝかに杖もて突き挾つた。上人チット痛さを堪えながら

「若し公にしてかく在さば、疾うに凍えて息絶えたことでムりませう、幸にしてこの日親、法華經の功德によつて、いまだ命には別條ございませぬ」

と言下に明確り言ひ放つて、後は聲靜かに唱題をつゝけてゐる。

責め懲さんとして却つて言ひ破られた義敎は、茲に於て最早や怒り心頭に發して、聲打ち震はし

「汝れ公威をも憚らぬ惡ッくき雜言それ者共、早う彼を嬲り打て！」

と言ひも終らず、憤然として袂を拂ひ雪を蹶立てつ元來た道を引き返された。後に上人は、無殘極まる官人牢守共の倦み勞かれるまで、太い樫の棒をもつて、五體を打ちすくめられたのである。

かくして上人は、入牢五百三日の間、時を撰ばず牢の廣場に引き出されては、色々の慘刑に身を苦しめられた。

或時のこと、上人は浴殿の中に欺き推し込められて、外より堅く戸を鎖され、沸き立つ湯氣に三時餘りも蒸し返へされたこともある。又或時には、階

子の途中に結ひつけられて、手桶の水を幾杯となく口の中へ流し込まれたこともある。その時には上人も、三十六提子までは自ら覺えておられたが、その餘は幾提子なるかを知らなかつたといふ。或は又、竹の串を以つて陰莖を刺し貫かれ、或は又灼熱せる鍬の先きを、兩の脇に狹まれたこともある。

けれどもこの濁末の世に、猶多怨嫉の法華經を行ずるならば、種々の大難に身を苦めらるゝと云ふことは元より期した覺悟であつた。それ故上人は、豫め此等の大難に備ふべく自分の耐忍力を試めされたことがある。それはいよ〳〵これから上洛弘法を志そうといふ、廿一歳の春の初めのことであつた。上人は自ら深く心に誓つて云はるゝやう

「賤弱の身を以つて、經王法華を弘むること、任重くして行添はず。途中或は種々の横難に遭遇して、退轉することもあらば、一は經王法華に傷をつけ、他は謗法の輩をして益々その非を増長せしむるの科あるべし。諸難の中、他は暫くおくも、劒の一難のみは殊更に忍び難く覺ゑたり。我今そを堪え忍ぶの力を試みん」

と、一心強盛に御題目を唱へながら、十日の間、一日毎に一本宛の指の爪を拐り取つて、その跡へ一々に針を突き刺し、その上七日の間、沸きかへる熱湯の中にこれをさし入れて、湯の冷ゆるまで、ヂッと我慢を續けてゐられたのである。

それ故上人は、如何なる横難に遭遇するとも、些のひるむ心なく、益々捨身決定して、勇氣は愈々舊に百倍するのみであつた。

或日上人は、いつもの如く牢の中に端坐しておられたが、フト窓越しに、牢の入口に掛つてゐる竹鋸を見て、不審の眉をひそめながら

「こは何のために用ひらるゝや」

とその由を牢守に質された。すると牢守は答へて云ふやう

血潮煙る焼鑪の惨刑

「これこそ汝が首を切らんための竹鋸なるわ」

と憎さ氣に上人を見返へした。

上人は之れを聞いて、其後密かにその竹鋸を取つて、牢の中の土に摺りつけ、悉くその刃をつぶしてしまはれた。後牢守、この樣を見て目を逆立て

「汝如何に刃をつぶすとも、更に鋭き外の鋸にて、汝が頸を絶ち切るべし」

と威丈高になつて、窓際にすり寄つた。上人莞爾として笑を浮べながら

「元より法華經に奉る身の、何んぞ少し計りの苦を厭ひ、露の命を惜んで、如恁きのことをいたさうや。何れは唯だ衆生の爲めに捨つる命なれば、受くる處の苦み長く、猶も惱みを増さしめんとて、かくは利刃を下ろしたのである」

と平然として答へられたといふことである。

入牢五百三日の間、數々の責苦に上人は一日とて身體の休まる暇はなかつたが、その中最も悲壯を極めたものは、實に冠鑪の惨刑であつた。

永享十二年の歳も早や暮れやうとする十二月の或日のこと、先程より同じ牢内の囚人等に向つて、淳々として法華經の功德を說き聞せられて居た上人は、フト窓外の騷々しさに、見るともなく牢の廣場を透し見るに、十人餘の牢守官人等が、何か頻りに罵り喚きながら、急がしそうに彼方此方と馳せ廻つてゐた。上人は別に意にも止めず、そのまゝやゝ暫く說法を續けて居られたが、頓がて一人の牢守によつて、荒々しく窓外へ引き出されてしまつた。

見れば、いつの間に來られたのか、廣場の一隅には、將軍義敎公、二三の近侍を從へて、床几に腰打ち掛けながら、嚴然として控えてゐる。その左手のやゝ離れた處には、山の如く積まれた薪炭が、劫火の如くに燃へ騰がつて、その中には一つの大きな鐵鑪が奥深く埋められてあつた。そしてその側には、二人の牢守が細長い鐵の棒を地上に突つ立てながら、阿修羅の如くヂッと燒

鑪を見詰めてゐた、火の周圍には、火影を受けた六七人の官人共が、赤鬼のやうにズラリ並んでゐる。義敎の正面廣場の眞中には、破れた荒莚が一枚寂しく敷かれてあつた。上人は牢守共の手によつて、遂にその上に引き据えられてしまつたのである。

一目瞭然、上人は直ちに總ての事情を讀むことが出來た。上人は合掌し沈思瞑目して、低音に御題目を唱へながら、この慘憺たる光景の眞唯中に、泰然として山の如くに端坐した。そして心中密かに死身弘法の色讀に無限の法悅を味ひつゝあつたのである。

暫時の間、上人を圍む人々の顏の上には、殘酷な表情が波の如くに打ち動いて、場内の空氣は死のやうな恐ろしい沈默に鎖されつゝ微かに震へてゐた。

と、この時、將軍義敎はツト床几を蹴つて立ち上がり、手に持つ扇子をキツと握り締めながら

「いかに日親」と上人を呼びかけた「汝徒らに剛情我慢にして、數々公威を蔑り、只管余に法華經を勸むと雖も、この義敎いつかな汝等如きものゝ言に耳を貸すべき。されど汝が日頃の殉敎まことに嘉すべきものあれば、我今汝に親り法華經の功德を取らすべし。汝謹んでこれを納るゝや否や」と、毒を含んだ罵りやう。上人は直ちにそれと悟りながらも、やをら眼を開いて

「こは難有き仰せを蒙るものかな。日親日頃月頃心貧しき身を以つて、諸經中王の法華經を行ずるに、唯だ力の足らざらんことをのみ恐れ居りましたる處、今親り法華經の功德を賜はるとの御掟、日親一期の冥加に厶りまする」

と故意と恭しくお請けすれば

「おゝよう云ふたその一言。したが此度汝に取らする法華經の功德は、今迄になき靈驗あらたかなるものなれば、强き利生に打たれて、必ず見若しき振舞すな」

「これは又大將軍のお言葉とも覺えませぬ。法華經の功德を賜るに、日親は喜びこそすれ、決して見苦しき振舞はいたしませぬ。經には一心欲見佛、不自惜身命と說かれ、吾師大上人は身命を捨て候程のことなくては、佛には成られずとこそ誡められて厶りまする。されば今日親が法華經の爲め嗅きこの身を奉るは、却つて法華經の功德を得て、妙覺果滿の佛果をも成ずるの道理、アラ難有や日親が佛に成らん第一の方人は、實に大將軍にてお坐します。いざ疾く法華經の功德を賜はれかし」

と、少しの惡ろびれたる色もない。

「えゝ厭まで口の耗らざる靑道心。今日こそは法華經の現證思ひ知れ。ソレ者共、用意はよきかッ」

と猛り狂つた猛虎の一吼！　先程より拳を握り片唾を嚥んで事の成行を凝視つてゐた牢守官人等は、この一喝にフと我に返つて、ギラリ目と目を見交はした。上人は已に心に期したことゝて、この前代未有の大迫害の前に坐して、少しの躊躇ふ氣色もなく、從容として聲嚴かに、壽量品の偈文を唱へ出された。

「自我得佛來、所經諸劫數、無量百千萬、億歲阿僧祇――」

音吐朗然、少しも平生の看經と異りがなかつた。

この悠容迫らざる態度を見て、益々氣を焦つた將軍義敎は、滿面カッと朱を濺いで

「む、口惜しやおのれ日親、者共早う、ものな云はせそ」

と云ふ間も遲く、山と積む火は見る〳〵牢守共の棒に突き崩されて、今や黃金の色に燒け爛れた大鎧は、眞紅の火花を散しながら、地獄の鏤壺の如くその中から顯はれた。そして二人の牢守の擔ふ二本の鐵の棒に載せられて、專心經を誦す、上人の目の前に運ばれたのである。

並みゐる人々の面には、遒がに恐怖の色が滿ちてゐた。けれども將軍義敎の面には、如何にも痛快極まる夜叉の如な赤い笑ひが漂つてゐた。

軈て牢守共によつて高く揭げられた燒鍋は、そのまゝ無殘にも、ヂリヂリと上人の頭の上に冠せれたのである。嗚呼何等の慘狀ぞ、あはれ上人の毛と肉と血潮とは、見る〳〵うちに燒け爛れて、鼻を衝く死のやうな嗅氣と共に、白い煙は濛々として白龍の燒け狂ふが如く、燒鍋の周圍より漏れ騰るのであつた。と、鍋の中には悲壯な聲が續いては止み、止んでは又續いて

「……我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閣、種々寶莊嚴、寶珠多花果、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、常作衆伎樂、雨曼荼羅華、散佛及大衆――」

と、血を絞るやうに、人々の耳朶を掠めて、冬の寒空に消えて行つた。

先程よりヂット息を殺しながら、この有樣を見詰めてゐた義敎は、この時フト扇子を揚げて牢守共を制して云ふやう

「殺しては興なき業ぞ。一先づ彼を許し遣はせ」と如何にも晴やかに復讐の眉を開いて「追つて又、罪は問ふことにいたすであらふ」

と、恰かも狂人の血を見て笑ふが如き、一種の殘酷なる表情を目のあたりに動かした。

餘りの慘刑に、いさゝか恐怖を抱いてゐた遒がの牢守共も、今はこの「許せ」の一言に、ホッと輕い吐息を漏しながら、急ぎ上人の頭より、その灼熱せる燒鑵を取り除いた。

半ば神消え氣絶えなんとした上人は、實に幸か不幸か、次の慘刑を條件にしばらく危い命を助かつたのである。けれども、その頭は燒け爛れて柘榴の如く、顏は火氣に打たれて見る影もなく眞赤に張れ上がつてしまつた。

義敎はこの樣を見て

「おゝ、心地よい法華の利益！　頭は爛れ面は膨れて、見るから尊い佛の相

！」と、カラ〳〵と大きな聲に嘲笑つて「如何に日親、この度こそは、緊と胸にこたへたであらう」

と罵つた。

「毎自作是念、以何令衆生、得入無上道、速成就佛身」

苦痛の中にも經讀む聲を斷たず、漸くこれを誦し終つた上人は、この時靜かに兩眼を開ひて

「日親、如何にも難有く身にこたへて、悦一う覺えまする」と、心から感謝の情を現はしながら「數ならぬ身を以つて、經王法華を色讀し得ること、全く大將軍の御賜物と申さねばなりませぬ。日親若し幸にして當來世に成佛得脱の時もやあらば、先づ第一に大將軍をこそ、眞つ魁けて引導まゐらすることでムりませう」

と、大きな眼に、法悦の涙さへ浮べて、涕はしそうに義敎を見た。義敎こ

れを聞いて又もやカツト目を瞋らし

「えゝ、苦しまぎれの小癪な雜言、戯語には聞く耳貸さぬわッ」と大喝して、ツト床儿を立ち上がりながら

「日親、何れ又法華の利益を取らするであらう。それまでは、キッと神妙に待ちおらうぞ！」

と、強いて作つた嘲笑の響きを後に殘して、そのまゝ歸舘の踵を返へしてしまつた。

翌、嘉吉元年三月十三日、將軍義敎は近侍の者に云ひ含めて、獄屋に上人を問はしむるやう

「法華經の行者を惱ます者は、必ず現身にその親報を蒙る由、既に經文分明なりと聞く。されど我汝を惱ますこと一歳餘りに及んで未だその親報を見ず。經文それ欺りなるか、但しは又、汝眞の法華經の行者にあらざるか」

血潮煙る燒鑪の慘刑

と、上人卽座に答へて傳へしむるやう

「經文に何の僞りを申しませう。又日親とて、必ず法華經の行者に相違ゐりませぬ。お痛はしや公、三年を出でずして、キツと現罰を蒙ることでゐりませう」

と、義敎は近侍の復命を聞いて大に嘲笑ひ、再び上人に問はしむるやう

「汝が言甚だ從容なり。假令我三年の間に災に逢ふと雖も、時は亂世なり、何ぞ幵を以つて汝を惱ましたる現報とのみ云はん」

と、上人亦答へしめて云ふやう

「三年にして遲しと仰せあるならば、まさに、百日に縮め申すでゐりませう」

と、何の躊躇ふ色もなく、申し傳へしめた。

義敎はこれを聞いて口惜しさやる方なく

「憎くき不遜の彼が言分、キツと目に物見せて呉れん」

と、鼻息荒く敦圉いた。

それから上人に對する罪科の詮議は時々開かれたが、その度毎いつも議論は百出して、何等の纒まるところもなく、三月あまりの日を費した。

六月廿四日、この日は丁度義敎が、使を獄屋に遣はしてから、九十九日目に當る日であつた。その朝義敎は、赤松滿祐の館に赴かふとして、フト自分の帶ひてでた脇差の鞘走つたのに氣が付いて、不審に思ひながら、早速本阿彌清信を呼んでこれを詰めさせたが、すぐ又再び鞘走つてしまつた。三度鞘走つて、三度これを詰めさせた時、義敎は他の一端を清信に取らして、試にこれを引いてみた。と、今度は工合よく收つて、いくら引くとも少しもくつろがない。義敎は漸くこれに氣を取り直して、やゝ不興な顏を和げながら、又これを帶かふとした時、不思議にも鞘は四度スルリ走つてしまつた。義敎は大に怒つて直に清信を獄に下し、自分は他の脇差を帶びて僅かに滿祐の館

血潮煙る焼鏡の惨刑

に赴いた。

けれどもこの凶兆に氣付かなかつた義敎は、遂にその夜滿祐のために欺き殺されて、親り上人の豫言を實現したのであつた。

あゝ恐るべきは返す〳〵も謗法の罪、尊むべきは愈〳〵法華經の行者ではあるまいか。祖師に於ける執權相模守の百日の中に兵亂に逢ひたる、今又上人に於ける義敎の百日の中に臣下の爲めに殺虐せられたる、彼を思ひこれを念はゞ、誰か謗法の罪を恐れぬものがあらう。心あらん者は、これら現罰の恐るべきを見て、益々法華經の行者を敬はねばならぬ。

三日經上人

▲六條磧の耳鼻削ぎ

慶長十三年十一月、日經上人は、その弟子日秀、日壽、日顯、日玄、日堯の五人と共に、東照宮家康の召しに應じて、淨土宗と公朝に宗義の勝劣を決するため、駿府より遙々江戸城に向はれた。そして假りの宿所を蟹町の一隅に設けて、旅の疲勞を慰する暇もなく、何くれと法論の準備に忙殺されながら、再び上意の下るを俟つてゐた。

四五日の後、江戸城よりの使者は蟹町なる上人の宿所を訪れて、法論はいよいよこの十五日、江戸新城の大廣間に於て、諸人立合の上取り結ぶべしとの命を傳へてきた。上人はこれを聞いて今更の如く打ち喜び

六條磧の耳鼻削ぎ

「あはれ、祖師已來の理想を遂行するは今なるよ」

と、莞爾として弟子方を顧みられた。

明日はいよ〳〵法論といふ其前夜、上人は如何にも晴やかなる心地に、弟子方を膝元近く招き寄せられて、澁茶に喉を濕しながら、四方八邊の話の序で、明日の論場に於ける注意の事項など、色々と細かに物語られて後

「兎角日頃の怨恨を重ぬる我等なれば、各々は相構へて麁忽の振舞これなきやう、彼等は些々たる事にも、お上の威光を笠に、必ず事を荒立つであらう」

と入念に彼等の注意を促がして、その夜は師弟六人枕を竝べて前後も知らず安らかな熟睡に落ちた。

何處からともなく洩れ聞ゆる漏斗の音は、沈々と闌け渡つて、草木も眠る丑滿の眞夜中もやゝ過ぎた頃、何者とも知れぬ覆面武裝の曲者二三十人計り、

折柄冴え渡る月光を背後に浴びながら、手に〳〵獲物を携へて、密かに上人の宿所を取り圍繞んだ。

四隣閒として元より知るべき人の影もない。時は好し、機は熟せり！

「夫れ續けッ！」

と誰やらの罵つた下知の下、宿所の雨戸は見る〳〵中に敗られて、曲者等は流れる如く室内の闇に入り亂れた。と軈て聞ゆる啞馬の聲、亂打の物音！

アッと云ふ叫び聲に次いでムームと云ふ物悽き唸き聲！

「何故の亂入なるぞ。卑怯なり。名宣りおらう！」

と叱咤したは確かに上人の聲、然かしそれも眞の一言、後はすぐ苦しい唸きの聲に代つて、徒らに曲者等の嘲笑の中に悲痛な響きを殘すばかり、雷光の如く來つて、電光の如く演じ終られた此等悲劇の一幕は、終に彼等曲者の四散した後、そのまゝ無殘にも闇の中に葬り棄られて、曉方近くに僅かに人々

によつて發見されたのである。

永い間の上人の理想は、今や終に畫餅に歸してしまつた。上人は勿論のこと、弟子五人、何れも皆腕を折り膝を挫ひて、殆んど一語をすら發することの出來ない瀕死の有樣である。取圍む人々も唯だ事の意外に目を見張つて、何の施す術もなく、徒らに曲者の詮議に時を過す中、早や江戸城よりの使者は物々しく入り來つて、頻りに出場の用意を促がした。

瀕死の死人は、對論は愚か、何うして出場することが出來やう。上人は重傷の痛手に轉々懊惱して、終に昏瞑の狀態に陷りつゝあつたのである。けれども二度三度、頻繁なる江戸城よりの使者は、何の可籍するところもなく、強いて血に染む上人等師弟六人を戸板に乘せて、江戸新城に舁ぎ入れてしまつた。

「余法華經弘通の故に、度々の大難に遇ふと雖も、殊更慶長十三、十四申酉

兩年の法難は、元祖以來前代未聞なり。戊申霜月十五日、武州江戸に於て侍多勢來りて、理不盡に踏み打擲、半死半生に成らせて板戸に引き乘せ城内に召入れられたり……云云」

これは上行寺曼荼羅中、上人自らの記された言葉である。

偖、上人は何故に如此大迫害に逢はれたのであらうか。今その原因を探るに、これには色々の遠い事情が伏在しておるのであつた。

その初め上人は、京都の大折伏を終つて、慶長十三年の秋、一天四海皆歸妙法の一大理想を遂行せんが爲め、出でゝ美濃尾張地方の大布教を開始されたのである。

上人は先づ事の初めとして、尾張の熱田に赴いて新本遠寺に假りの錫を止め、茲に暫時く法莚を張つておられた。その熱烈黑鐵をも溶すべき信仰と、親切なる教說とは、瞬くうちに士民の歸向參詣するものゝ數を增して、法莚

六條磧の耳鼻削ぎ

は日に〳〵盛大に赴いて行くばかりであつた。然るにこの熱田に正覺寺といふ淨土宗の寺があつて、その住職なるもの上人の折伏を聞いて大にこれを憎み、終に同腹の僧を集め、信徒を教唆して或日突然問答を望むと揚言しつゝ、上人の法莚に亂入した。そして法論とは名計り、徒らに上人を取り圍んで罵詈讒謗を浴せかけ、果ては瓦石を投じ、參詣者の道を塞ぐなど、眞に亂暴狼藉を極めたことがある。上人は豫め期した事として少しも騷がず、安然として彼等に向つて云はるゝやう

「法門のことは惡口狼藉を以つて決すべきものにあらず。宜しく法論の格式によつて理否を決すべきである」

と、乃ち書を正覺寺に送つて、格式を以つて廿三個條の答案を求められた。

けれども正覺寺は、遂に此の廿三個條の出案に答ふることが出來なかつた。それ故上人は更に法輪を轉じて知多郡の緒川村に法莚を張り、茲に暫く前同

樣、而强毒之の大折伏を加へておられたのである。然るに此處にも亦善導寺といふ淨土宗の寺があつて、大に上人の强化を怨み、その法莚に暴れ込で、正覺寺にも增した亂暴狼藉を働いたのである。此時上人は法莚より淨土の三部經を出してその非を指摘し、且つ復た廿三個條の難問にも答へしめたところ、彼等は聾の如く啞の如く、終に一言をも發することが出來なかつた。茲に於て正覺寺善導寺等は大に狼狽し、急に近江美濃尾張遠江等の學匠を集めて鳩首この難問を討究したけれども、終によく一人の之を解するものがなかつたのである。

窮鼠は却つて猫を咬むの道理、茲に彼等は種々協議の結果、終に德川氏の淨土宗信者なるを奇貨とし、奉行等の內意を遂げ、一に幕府の權威を假りて上人を壓迫しやうと試みた。そこで正覺寺の澤道はいよ〳〵駿府に出頭してこの事を訴へて云ふやう

「此頃法華の僧常樂院日經といふ者、濃尾地方に於て專ら邪法を弘め剩さへ念佛者は師檀同罪阿鼻獄に入るべしと主張し、以て淨家の人を糞蟲蟯螟に比しておりまする。況んや師檀同罪の言、その惡名の歸する所亦大檀那の上にかゝつて、如何にも由々しい一大事と心得ますれば、何卒公儀の御威光を以て、宜しきやう早々御成敗の程、お願ひ申す次第に厶りまする。」

と、言葉巧みに德川氏の憤怨を挑發したところ、而もこの計畫はうまく圖に當つて、直に江戸將軍の上聞にも達せられたのである。

駿府に於ては、遉がに堪忍を以て天下を一統し得た家康も、之を聞いて大に喜ばず

「我亦專修の門に入れる身の、何條如此の誹りを受けて嘿しおらうぞ。その者を召せ、必ず事を決するであらう」

と、早速使者を遣はして上人を駿府に召したのであつた。けれどもその結果は、却つて上人に幸ひして、他日日を改めて公廳に是非を決すべしてふ、多年の宿願を成就すべき運命を齎らしたのである。あゝ上人の胸中その喜びや如何に、某信徒に與へられたる書の中に

「我が祖師日蓮大士、常に公場に於て法論することを願ひたるも時到らず、此の事かなはずして止めり。我が先輩ども共にこの義を主張すれども皆果さず。今や天下一統の世、今にして三國通軌の法論を開かば、祖師先輩の念願も聊か達し、佛天三寶の大恩を報ふるに至る。豈にこの上の喜びやある」

と、以てその嬉悅の情を察することが出來るのである。

けれとも此時爲政上宗教上、各方面に於て只管國家の平穩を期待して懷柔的消極主義を取つてゐた家康は、先きの安土問答、日奥の不受不施等の例に鑑みて、痛く上人の積極的折伏逆化の態度を憂慮し、密かに學校寒松をし

六條磧の耳鼻削ぎ

て内濟調停を計らしめやうとした。そして種々上人に諭すところあつて、體よく例の懐柔主義より上人に陳謝狀を出さしめて圓滿なる局を結ばふとしたのである。されど上人は、如此懐柔によつて籠絡されるやうな、そんな薄弱なる意思の人ではなかつた。上人の自ら書かれた書の中に

「去年駿府に於て御立腹にてめしよせられ候砌に、がつかうの御内證とて使を給候趣は、此度淨土宗への二十三個條法問かけ申候、卒爾を致候と上様へ一筆をさゝげ被申候へ、詫言可申進由に候。某申分に我等遣候二十三個條の法門を御らん候へ。皆な法華經のほうもんと宗旨のたてばにて候。それをそつじとかきあげ候へば、法華經はそつじの經、日蓮はそつじの人になし、それがしは無間地獄へおち申候間、此の上はするがの辻にたちうづめにうめさせられ、百日百夜ひかれ候共、わび事申まじきと使に申し切り候。これは法華經にきづつけまじきために、身命をすてゝ申きり

候へば、五のまきの我不愛身命但惜無上道のきようもんにあたり申候……」

と、卽座に寒松が折角の膽煎をも一蹴し去つて、益々死身弘法の意氣を示したのである。於是か遠がの老獪極まる家康も百方術盡きて策の施すべき道なく、遂に思ふ所あるに托して上人を江戸城に召すことゝなつたのである。

あゝ上人たるもの公廳の對決は元より望む處とはいへ、事茲に至つては豫め覺悟するところが無ければならぬ。

「於江戸宗論勝可申事うたがいなく候。雖然御所之御しうしに候間いのちはあるまじく候。りやうぜんじやうどにて御めにかゝり可申候」（某信徒に與ふる書）

と、これ實に江戸城に向ふ時の上人の覺悟であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

いよ〳〵江戸新城に舁ぎ入れられた上人は、その瀕死の病體を情もなく幕

六條磧の耳鼻削ぎ

吏の手によつて晴やかな大廣間の眞唯中に投げ出された。と、その時、丁度深い夢からでも覺めた人の如く、不圖我に返つて、見るともなく四圍の樣子を見廻すと、苦痛に揉まれた力ない上人の瞳孔にも、その座の美々しい光景が、閃光の如くに映つて見えた。

見上ぐれば、正面上段の間の一段高いところには、大御所家康、將軍秀忠を始めとして、その下手には淺野彈正少弼長政、長尾侍從景勝、羽柴越前上政宗、蒲生飛彈守秀行、南部信濃守、信庄宮內、北條左衞門、本多佐渡守大久保相模守、伊奈備前守、鵜殿兵庫守、土井大炊助、酒井雅樂頭、安藤對馬守、青山圖書頭等、綺羅星の如くに居流れ、他の一方には紫衣の四老たる增長寺の源譽、新知恩寺の幡隨意、鎌倉光明寺の及把、鴻巢勝顯寺の不殘を始めとして、その次には當日の權威者たる判者高野山の沙門賴慶を筆頭に、對論者英長寺の廓山、幷に付添小田原大連寺の了的、法中の奉行岩瀨大長寺の源榮、執筆者光嚴寺の專想、及びこの法論の關係者たる正覺寺の澤道、智福寺の眞空等座を列ね、尙その後方には聽衆として眞言宗よりは大山寺實雄、大磯地福寺の宥養等、天台宗よりは仙波喜多院の運海、同中院實尊、淺草寺の安養院良慶等、禪宗よりは大中寺の良雄、同宗寅、皆川桀岑寺の宗圓、吉祥寺の泉龍、青松寺の麟曹等、皆威儀を正して勝敗如何と待ち設けてゐる。

この堂々なる大廣間の光景を打ち見やつた上人の面には、潮の躍るが如く時ならぬ喜悅の閃きがほの見えたが、軈てその眼は、何くれとなく自分を勞はり介抱する弟子等の身の上に落ちた時、上人の面は復た元の如く土色に變じて、果てはそのまゝ苦痛に眼を閉じてしまはれるのであつた。

この時同伴者の一人は、恐る〳〵兩手を支へて

「常樂院はきつい所勞の體に見えまする。よつて本日の討論は力及ばぬこと

かと思はれまする」

六條積の耳鼻削ぎ

と申上げた。すると家康は非常に立腹して

「何、所勞とな！」　とキッと容姿を改めながら「こら日經！　汝如何に謀略を用ゆるとも、書を指してより既に五十日、未だその所勞の由を聞かざるに、今忽ちにして所勞といふ。誰かこれを信ぜやう。汝或は今日の討論を恐れて、この家康を欺かんとするか。エ、さても口惜しき汝が振舞かな。キリ〳〵と退去りおらうぞ、聞く耳持たぬわッ！」

とそのまゝ席を蹴つて奥深く御居間に這入つてしまはれた。一座の人々は、この不意の出來事に膽を消して、唯だ驚きの目と目を見合せてゐるばかり。

やゝあつて家康は、判者頼慶を召して命じて云ふやう

「今日兩宗の討論に於ては、專ら正路を守つて、決して義を强ゆるが如きことこれ無きやう、只管偏頗を避けて理非分明、宜しく甲乙の決判を遂げられよ」

と、この寛大なる優掟に接した頼慶は、意外にも事なくして濟んだのを喜びながら、急ぎ元の論場に來て見れば、早や廓山、了的、源榮を始めとして、老中奉行、諸宗の聽衆等座を崩しつ、日經の枕邊を取り圍んで頻りに法門を强いてゐた。

廓山等は、この樣を見て奇貨措くべからずとなし

「汝、平生の寛言、今これを亡へるか、さても臆しつることよ」

とて、扇子を採り、疊を撲つて、聲高に先づ三部經無得道の妨難を謝し、頻りに對手の無言なるに乘じて理不盡なる難題を疊みかけ、暫時が程はさしもの大廣間も、喧々囂々として、宛然無頼の徒の寄り集りの如き奇觀を呈したのである。

頼慶は座に復つて、徐ろに威儀を整へながら、騷々しく問ひ詰むる彼等を制すと思ひの外、却つて火に油を注ぐが如き口吻にて

六條磧の耳鼻削ぎ

「偖、常樂院殿！」と靜かに上人を呼び据えた「書を以つて淨土家に贈り強ひて法論を望む身の、何故なれば速かに討論を遂げられざる。日頃の大望成就は唯今に侍るを　……」

と、嘲弄半分の無情い催促。けれども瀕死の重傷を負ふた上人の、如何して法論をなすことが出來やう。

「死人の如く總身血にそまり、戸板にあをのけに伏したるまくらのあたりにて、淨土宗に法門をいはせ……」

たればとて元より返事の出來やう筈がない。上人は唯だ總身の重傷に懊惱煩悶するのみであつた。

「充分責め盡した」といふ頃を見計らつて、判者たる賴慶は如何にも晴やかなる顔に起立して

「今日の對論は、衆人の覽るところ、明かに淨土家の勝利を示すもので厶る。常樂院は既に口を閉ぢて、一言の申開きも厶らぬ」

と、聲高々に判決した。

この時弟子等は、この偏頗極まる判決に涙を呑みながら

「何卒、玆十五日の御猶豫を賜りたい。然すればその中キッと所勞を治して、必ず法論に及びませう程に……」

と聲を揃へて哀願したけれども、家康始め並み居る人々は、いつかな之を聞き入れず、強ひて上人等師弟六人の法衣を剝奪して、遂にこれを獄に投じてしまつたのである。

上人は牢獄の中にあつて、手枷足械に身を苦しめられながらも、日數を經るに從つて、やゝ元の如く重傷の回復を見ることが出來た。すると玆に又一つの難問題が起つて來た。それは牢を圍んで

「つくばう、さすまた、弓やりにて、うちにもそとにも番衆を大勢つけ、諸

六條磧の耳鼻削ぎ

さむらいひるよる一番衆、二番衆、三番衆、うちかはり〳〵いきもつかせぬやうにとりこめ、念佛無間は經文になしと書き物せよ」

と、幕吏どもの迫ることであつた。けれども上人は

「法なんに、御所の御意にて、我等弟子衆を五ところの奉行衆にひきはなしおき、ほだしをはかせ、大ぜいとりまかせ、氷水にてしも月しはすせめ候へども、ほうぼう書き物一ふでもかゝず」

その上折伏は更に激烈を極めて、「死者に妄語と申す如く、無性なる日經が枕下にて、淨土宗の坊主に二個條法問を云はしめ、死人の如く息僅かに通ふ故に一言の返答ならず、御上意なりとて衣を剝ぐ、誠に日本無雙の大强盜、國主大理不盡の闇君なり、剩さへ天下法華宗諸寺に威伏を以て無理に書物をなす斯の如し、我が自在非義に動さるゝ者、只賊徒の國を持つなり、本佛幷に三世十方佛陀三寶、法華の威光を開きて、取つて大罰に懸け、急

〻自界の逆難を判じて、太守、一門破落々々滅亡せしめ、此の謗法の國を攻め崩して、晴明の國と成さしめ、廣宣流布させ給へ」

と、日夜間斷なく、番手の幕吏に訴へたのである。されば番手の中には、遂にその熱誠に感じて、密かに手に持つ自宗の數珠を切り、恭しく法華經を頂いて改宗するものも數多くあつた。

これらの事實によつて、上人は更に極度にまで家康の憤怒を招いたのである。丁度その折、淨土宗側に於ては、上人の關東調伏を以つて大坂方の內意によるものだと讒訴した。これには道がの家康も少からず膽を消して、烈火の如くに憤り、遂に上人を死罪に問ふて、京都へ護送することゝなつたのである。

「正月七日、天下の渡物となして、江戸を追ひ立て、弓鐵鉋鑓太刀を大勢に仰付け、師匠弟子を取圍み、上京の道々留々へ下知して、皆城々へ落付、

六條磧の耳鼻削ぎ

六條磧の耳鼻削ぎ

七重八重に番手を置き、密かに攻事を敷き、朝敵の如し」

と、如何にその樣の物々しかつたかゞ、略これによつて推測され得るのである。

かくて上人は、朝敵の如く澤山の幕吏に圍まれながら、弟子五人と共に、二月の十八日、漸く京都に到着した。そしてその翌々日二十日には、何れも身を縛められたまゝ、先きに高札を持たせられて、隅なく落中を引き廻されたのである。その時上人は、辻々にて罵り騷ぐ群衆に向つて云はれるやう

「我師大聖人、既に度々の法難に、或は召し捕はれ、或は流罪せられ、或は又刑上の鑕に座し給ふて、親しく我等に末法法華行者の軌を示され給へり。今我等幸ひにもその軌を踐んで、法華行者の列に加はるこそ、一眼の龜の浮木の孔に逢へる喜びにもいや增したり。汝等我等を目して徒らに盜賊の徒と思ふべからず。正に深心に題目を唱へて、早々捨邪歸正の實を擧ぐべきなり」

と、聲高々に呼はつて、それより雜色共に送られながら六條の通りへ出で、遂にそこの河原に引き据えられてしまつたのである。

けれども河原に引き据えられた上人師弟六人は、何れも覺悟のことゝて眉だに一つ動かさず、泰然として尙も幕吏を始め、並み居る見物の人々に向つて、激烈に彼等が謗法の罪を責めたのである。見物人は互に拳を堅めつゝ、遠卷きに上人等師弟を取り繞いて、皆口々に哮り罵つた。するとこの時、大將と思しき一人の幕吏は進み出で、ハツタと上人を睨まへながら

「如何に日經！　汝が日頃の惡口雜言その罪唯今なるぞ。汝此期に及んで徒らに哮り狂ふとも、爭でか彌陀の現罰を遁れ得べき。それよりは早々觀念して、神妙にその罪科を受けよ」

と得意氣に大聲叱咤して、偖、雜色共を打ち顧み

「疾く彼等を刑に處せやッ！」

六條磧の耳鼻削ぎ

と、聲荒々しく呼はつた。

「ハヽッ！」

と聲に應じて躍り出でた雜色五六人、各々刀を拔きつれて忽ち上人等師弟の前に立ち塞がり

「觀念せよ！」

といふ聲諸共、齒尖のその眼を掠むる暇もあらせず、クザとばかりに彼等の鼻を削ぎ取つてしまつた。サッと迸奔る鮮血は淋漓として四邊の河原を染め、餘滴口より腮に滴つて、見るから悽愴慘鼻を極むるものがあつた。この中弟子日玄は、餘りに惡口過きたりとて、深く鼻を搔き切られたるため、遂にそのまゝ息絕えてしまつた。

血に厭くことなき雜色共は、この慘刑に尙ほ厭き足らず思つたが、今度は更らに上人の耳を截ち切つて、その迸り出る鮮血に、心地よい快感を貪りな

がら、血の如き笑ひを洩すのであつた。

然るに上人師弟は、如是き大慘刑に處せられながらも、尙且つ

「法華經の如來現在猶多怨嫉況滅度後の經文に當り、況やといふ況の字の如く、佛御出世の時より日蓮の御時、日蓮の御時より今我が時のかた、ねたみ多く、金言難有く覺ゆ」

とて、況滅度後の讖文に當りたるを喜び、その上

「我疵つくも法華經に疵つけず、これ我の喜びなり」

と、無上の歡喜に胸を躍らせながら、慘刑の臺上、自若として唱題裡に曼荼羅を大書し、その傍書きに滔々數百言を費して

「……終に六條河原に於て、及加刀杖の金文の如く、耳鼻を截ちて之を放つの擧に及ぶ。功顯德四弘の願誓に擬するなり（原漢文）」

と結び、正に觀るものゝ膽を奪つて、意氣天を衝くの壯美を示したのである。

六條磧の耳鼻削ぎ

かくして上人師弟は無情なる幕吏と愚民との嘲笑を浴びながら、全身滴る血潮を拂ひつゝ、愴很として刑餘の身體を放逐され、漸くにして程遠からぬ泡多口の或る寺へ辿り着かれた。

「……罪科過て泡多口の寺へ行き臥し候へば、信々の男女紛れ來て血に染たる物共を、守にかけんと泣きわめく。心も言も及ばざる體云ふばかりなし。宗祖大上人の東條小松原の大難に替はらぬ多し。今ぞかし。偖て廿一日朝大勢にて押寄せ、寺を打破り、某を押出し又駒福町も京の内なれば置くべからずとて押立て、境も大坂きづは、栖所處々の主使を立てゝ、日經を置くべからずと糺明せり」

と、實に上人師弟は、正義の身を以つて、却つてこれを置くに處もない有樣、僅かに信者の土藏内にかくまはれて、療養を加へられたといふ話である。

あゝ、波靜かなる太平洋を望んで上總の野に身を起したる布衣の一沙門、

狐影隻身、僅かに一卷の法華經を抱いて恰も無人の野を行くが如く滿天下に怒號し、身は假令六條河原に耳鼻を削がるゝとも、その灼熱せる信仰の動く處、上は大御所家康を始め、下は淨家禪宗の雛僧に至るまで、悉くこれを威伏し、一代七十年の間、五十餘の巨刹、六百の法弟十萬の信徒を獲たる日經上人、吾人はこの上人の傳記をひもとく毎に常に云ひ知ぬ感激の涙を絞り、油然として生を回す大信力の涌き出づるを覺ゆるものである。願くばこの一大偉人の靈格をして永く靑史に止め、獨り我宗のみならず、廣く全日本國民をして、力ある追臆となさしむべきである。

一三話　哀一　妙麿

一　山寺

父親なし子

今を距る七百五十年のその昔――九州は筑後の國の山奥に、ある一軒の古寺があつた。寺の背後には高い山々が幾重にも重疊り合つて、鬼のやうに蒼い空を摩でゝゐる。前方の少し低地には僅かの農家が四方八方に散在して見るから純朴そうな住居であつた。

寺の境内は、その眞中に少しばかりの平らな庭を殘したまゝ、四圍は悉く神々しい杉の木立に圍まれてゐた。住持は最早や六十の坂を五つ六つも越したかと思はれる、至つて玆悲深い老僧、三四人の小坊主が、いつもその德に懷いて膝下に色々の讀み書きを敎つてゐた。

山家の常として、何處といふ遊び場のない里の小供等は、毎日のやうに門前の小さな坂を登つては、この古寺の杉の木立の間を廻つて遊んでゐた。

今日も漸く暮れやうとする頃、先程より色々の遊戯に疲れ倦きた小供等は、誰言ふともなく、これから鬼事遊びをして歸らうといふことに衆議一決した。

暫時の間は靜かな寺の境内も賑やつて、一としきり小供等の黄い聲して、盛んに喚き騷ぐ聲などしてが、軈て鬼になり手がないとかで、折角の鬼ごと遊びも興ざめやうとした。丁度そのところへ一妙麿はお師匠樣の用事も濟ませたので、小供心のツイ友達の戀さに、庭に下り立つて、杉の樹の蔭に身を寄せながら、羨ましそうに皆の遊ぶのを見詰めてゐた。と、その中の一番年長の餓鬼大將は、目早くそれを見付け出して

「おゝ一妙殿か、よい處へお來やつた。今日は我等の仲間へ入れてやる程に

早うこゝへ來や」

「何、仲間入りさして下さるとや？」

いつも里の小供等に、仲間はじきをされてゐた一妙麿は、嬉しさに小さい胸を躍らせながら、法衣の袖も邪魔そうに、皆の中へ走つていつた。

「ほんとに私も入れて下さるか？」

「入れるとも〳〵、さ、お身は鬼におなりやれ」

「鬼に？　初めから……」

「厭か？」

「厭ではないけれど……」

「厭でなければ、早うおなりやれ」

折角仲間に入れてくれるかと思へば、初めから鬼になれといふ。一妙麿は「厭だ」といへば又小供等に惡口いはれるが悲しさに、素直に鬼になつて目隱

しをした。

又一としきり寺の境内は賑やつて、小供等のバラバラと逃げ隱れて、互に喚び交はす聲などが、夕暮の木立の間に響いて聞えてゐた。一妙麿は衣の袖に汗を拭きながら、懸命にみんなの後を追ひ廻した。そして時々は帶や着物を摑まへたが、その度毎小供等は、強く一妙麿の手を拂つて

「何摑まるかや、父なし子には摑まらぬわッ」

と、いつまで經つても、鬼になつてはくれなかつた。

一妙麿は口惜くて、終には杉の大樹に疲れた身體をもたせたまゝ、目隱しの上に衣の袖を覆ひながらシク〳〵と泣き出してしまつた。

「何、お泣きやるのぢや？」

小供等はバラ〳〵と寄つてきて、一妙麿を取り圍んだ。

「鬼が壓やか？」

「……」

「親なし子の不憫さに、一緒に遊んでやらうと思へば、人並みの嫌ひだて、鬼が壓なら遊ばぬまでのことぢや」

餓鬼大將には、同情の心が少しもなかつた。すると他の小供等まで

「さう〳〵、今日も母さんがさう云ふてぢや、親なしつ子と遊ぶなら、そなたまでも親なしつ子になるぞよと……」

「あゝいや〳〵。わしやもう去ぬる」

「わしも歸らう」

一同はまだ目隱ししたまゝの一妙麿をさし置いて一齊に歸らうとした。そして歸りがけに聲を揃へて口々に罵つた。

「おーやの無い子の食べものは、猿も喰はない澁柿か、やーぶになつた烏瓜……」

「や――い、や――い」

一妙麿はこれを聞いて、聲を震はして泣き悲んだ。

「あゝ、父さんがわしや欲しい！」

小供等の歸つた後、四邊は急に寂莫として、漸く迫つてくる夕暗は段々杉の木立を暗くした。寺男の衝く鐘の音が哀れに響いて、一妙麿の小さい胸を千々に搔き拐つた。と、何處よりともなく飛んできた一羽の小烏が、ガオ〳〵と鳴きながら、向ふの杉の小枝に羽を休めて、何か頻りに親烏を呼んでゐる。途端にこれも矢張り鳴きながら、夢中に後を慕ふて飛んで來た二羽の親烏は、小烏と同じ小枝に羽を休めて、兩方から嘴をもて嬉しそうに小烏の體軀をいたはつてゐた。

一妙麿はこの樣を見て

「あゝ烏畜類にさへ兩親が揃うてゐるものを、何故にわし計りに父樣がない

のであらう。わしや一層あの鳥が羨やましい。鳥になりたい……」

と、歔欷上げながら

「父親のないばつかりに、里の童等には毎日々々苛められる。それにこの先いくら出世したからとて、賞めて下さる父親のない身には、何を樂みに辛棒しやう、おゝそうぢや、お師匠樣には不孝なれど、一層のこと母さんの處へ去んでしまはふか?!」

と、とつおいつ腕を拱いて暫くヂツと考へてゐたが、漸く決心せるもの、如く、やがて着てゐた衣の袖をべり〳〵と引きちぎつて大地へ叩きつけながら

「そうぢや、去のう!」

と、唯だ一言、一妙麿は一目散に寺を下だつてしまつた。

二　母白露の佗住居

初めて聞く父の消息

夕暮の寂しさも打ち忘れて、細い山道を駈け上り駈け下つて、漸く隣村まで辿り着いた一妙麿は、やがて母の佗住居してゐる家の前まで來ると、急に悲しさが身に迫つて、家へ這入るももどかしく

「母樣、わしやもうお寺が厭やになりました。今日からは如何な苦勞でもする程に、どうぞ母樣のお側へおいて下され……」

と、母の膝に顏を埋めて泣き崩れた。

この時母白露は、丁度縫ひ物も終へて、今佛壇にお燈明を點けてゐたところ、それをこの不意の小さな闖入者に摑まつて、少からず膽を冷した。何かは知らず高まる胸の動悸を感じながら、白露はヂツと我兒の背を抱き締めて

「これ一妙！　何をそんなにお泣きやるのぢや。理由があらう、早う云や」

と、優しく顔をさし覗けば」

「母様、わしや口惜い」

と、歔欷くる

「何？　口惜いとや。また里の小供等と喧嘩して苛められたのであらう。さ、そちは賢い兒ぢや。ちやとこの母に話しや」

「あい」と漸く一妙麿は顔を上げて「母様わしにや何故父さんが無いのかや？」

「えゝッ！」と白露は思はず喫驚りして「何、父さんがないとお云やるのか？」

落つる涙をぢッと堪えて、一妙麿の問ひを避けながら

「それでは、矢張里の小供等に……」

「あい、鬼になつて掴へても、父親なし子には掴らぬと云ひ張つて……」

「おゝ……」

「そして終ひには、親のない子の喰べものは、猿も喰はない澁柿か、やぶになつたる烏瓜と云ふて囃してぢやわ」

「えゝ、そなたの喰べものが、澁柿と烏瓜？」

「わしや、口惜うて〳〵……」

「おゝ、道理ぢや〳〵」

「さ、母様！　早う父さんに逢はして下され……」

白露も今はもうこれまでと決心して

「そなたがそんなにお云やるなら、母は一什始終の話をして聞かそう程に、謹んでようお聞きや」

と、小兒を膝より推しやつて、居ずまゐを直しながら

「そなたも最早や今年は十二歳。どうやらお師匠様のお蔭によつて、少しは

讀み書きも出來るやうになつたことなれば、今母が云ふことをよう覺えてゐや。實はそなたの父さんは、この筑紫でも竝びない、大橋太郎光則とて、蠟奉行を勤めてゐた、それは〳〵立派なお武士……」

「えゝッ！　そんならわしにも父さんがあつたのか?!」

「おゝ、あつたとも〳〵、そなたにようの似た立派な殿振り……」

「母樣、わしやうれしい……」ともう涙の目に嫣然り笑を浮べて「して今その父さんは……」

「さ、語るも涙の種子ながら、丁度今より十三年前、まだそなたが母の胎内に居つたころ、不圖したことの機みから、父が蠟を盗つたとやら盗らぬとやら、無實の罪を誣ひられて、右大將鎌倉殿の御勘氣を蒙り、身は高手小手に縛められ、見るも痛はしいお變りやう……」

白露は、さめ〴〵と涙を零して

「その時、そなたの父のお云やるには、若し胎内なる兒が、幸にして男子にてあるならば、世間の人に父親なし子ぢやと後ろ指をさゝれぬやう、行末立派なものに育て上げて、どうか大橋の家名を傷けぬやうにと、くれ〴〵もこの母にさう云ふてぢや」

「して、今何處へ父さんは行かしやつた?」

「遠い〳〵、東の空の鎌倉へ引きゆかれて、とう〳〵冷たい土の牢屋へ入れられてしまうたわ……それからこの方十三年、今は生死の程も明らねば、母はこうしてその時父さんの行かしやつた日を命日に、御菩提をお祈り申してぢや。そなたも早う大きうなつて、父さんの御菩提を弔らうやう、よう心掛けねばならぬぞや……おゝそう〳〵、父さんからそなたへ殘された見せねばならぬものがある……」

と、白露は泣く〳〵立つて佛壇の抽出から、一封の立派な錦の帛紗を取り

出して來た。

「これは、そなたへ殘された、父さんからの大事の遺品ぢや。早う頂いて解いて見や」

云はれて一妙麿は、恐る〳〵その帛紗を推し頂き、胸躍らせながら震へる手先にその包みを解ひてみた。と、中から出たのは木の香のまだ新しい白鞘の一振の短刀！　それに墨痕美しい一封の書面が添へてある。見れば「大橋太郎光則」と、なつかしい父の姓名が記されて、その上に「未だ見ぬ我兒へ」と書いてあつた。

一妙麿は、うれしさと慕はしさに、その書面を顏に推しあてゝ、心ゆくまで泣きじやくつた。

「さゝ一妙！　早う讀んでこの母にも聞かしや」

云ひながら白露は、佛壇のお燈明をそれへ持つてきて

「ちやと讀んでみやいのう……」

「あい」

一妙麿は、漸く涙を斂めて讀み初めた。

一、書置きの事

某こと、全く身に覺えなき無實の罪によつて、鎌倉殿の御勘氣を蒙むり、明日は遙々東の空の鎌倉まで、引き行かれ候身と相成申し候。それにつけても心殘りなるは、胎の中なるそちが身の上、若し女子にてあるならば、良緣を求めて他家へ嫁き、たつた一人の母上に、心を碎ひて孝養を勤むべく、若し又男子にてあるならば、母に孝養は勿論のこと、他人より「父親なし子じや」と後ろ指をさゝれぬやう、精々良き師を撰んで勉强なし、行末天晴の人となつて、この大橋の家名を傷けぬやう、呉々も申し勸め置き候也、

前蠟奉行

母白露の佗住居

年月日

未だ見ぬ我兒へ

こう讀み終つた一妙麿は、感極つて小さい胸も張り裂けそう

「母様！」

「おゝ一妙！」

二人は相擁して泣き崩れた。

やゝあつて一妙麿は屹となり、何か決心せるものゝ如く

「母様、わしやもう一度、お寺へまゐりまする」

「おゝ、よう云ふてたもつた。そんならお寺へ戻りやるか？」

「あい、わしやこのお手紙を見るにつけ、こうして我儘云ふてはゐられませぬ。これからはキッと心を入れ替へて、よいお坊様になりますれば、どうぞ母様も御機嫌よう……」

「それでこそ、大橋太郎の息子と云ふもの、ほんにそちは賢い子ぢや」

一妙麿は丁寧に手紙を巻き收めて、短刀と共にそれを元の如く錦の帛紗に入れ、その上を細い絹紐もてシッかと結へながら

「母様、こりやわしに下さるか？」

「おゝ、上げますとも……今までは母が大事に預かつてをりましたが、今日からはそなたのもの、大切に保存して、身のお守りにするがよいぞや」

「あい、大事にいたしまする」と、一妙麿はそれを推し戴いて懐中へ收め

「そんなら母様……」

「おゝ一妙……」

「わしや去にまする」

「おゝ、もう行きやるか」

「あい、ご機嫌よう……」

母白露の住居

白露は急に悲しさが込み上げてきて、ヂッと我子を抱き締めながら

「ほんにもう、そなたは行きやるのか」

「あい、もう去にまする」

瀧なす涙が、憂し氣に見上げてゐる一妙麿の顏に降りそゝぐ。

二人の間には、暫時悲しい沈默がうち續いた。

やがて白露は、力なく我子を放して

「身體を大切にしや。そしてお師匠樣にも叱られぬやう、よう勉强せねばならぬぞや」

「母樣も、御無事にお暮しなされませ」

一妙麿は、何か目の底に希望の色を湛えながら、勢よく戸外へ駈け出した。

白露は門の柱に倚りかゝつて、薄闇の中へかくれゆく小さい我子の後姿をいつまでも〳〵見送つてゐた。

三　お師匠樣の居間

窓下に忍び泣く母の涙

暫くして白露は、フト思ひ返して着物の裾を端折りながら

「おゝさうぢや。この夕暮に、山道を小供の獨り歩行は寂しからう。どりやこの母が、そこまで一緒に送つて進げませう」

と、雨戸をピッシャリ締めておいて、一目散に一妙麿の後を追ひかけた。

けれども纖弱い女の脚は、到底元氣な男の子の脚には及ばなかつた。白露が漸く我子の小さな後姿を見た時は、丁度一妙麿が寺の門口を這入る時であつた。

白露はこれに稍安心して、息切れのする苦しい胸を擦りながら、二三歩後へ引き返したが、あまり時刻も遲れた故、どうやらお師匠樣の首尾も氣にな

お師匠様の居間

つて

「立聽きするといふことは、ほんに惡いことではあらうなれど、一寸と樣子を聞いて去のう……」

と、勝手知つた裏庭づたい、植込みの間を縱ひながら、密つとお師匠樣のお居間の窓際へ身を寄せた。丁度その時、室内では靜かに障子の開く音がして閾際へ手をついたらしい一妙麿

「お師匠樣、只今戻つて參じました」

「おゝ一妙か、案じて居つたぞ」

と、思つたよりも優しいお師匠樣のお言葉！

「はい……」

「こんなに遲くまで、何處に居やつた」

「つい遊びすごして遲ふなりました。これからは屹度氣をつけます程に、どうぞお許し下されまし」

「いや〳〵そちを叱りはせぬ。したが、まだ小さい小供のことなれば、遠い夜遊びは爲めになりませぬ……ム！　そちは又苛められたの？」

「……」

一妙麿の眼からは、熱い涙がホロホロと零れた。

「日頃あれほど云ひ聞けておくものを、ほんに困つた奴等ぢやのう……一妙つらくともキツと辛棒しや……いつぞやもそちに話した通り、唐の韓信といふ人は、人の股を潜つてまで、大事な目的の爲めにはならぬ堪忍を仕遂げたといふ。お釋迦樣のやうな偉いお方でも、矢張り十二年の間、艱難辛苦を積まれたればこそ、初めて佛にも成られたのぢや。のう一妙！　おゝそう〳〵そちが好きなあの梅の花、あれとても矢張りその通り、長い冬の間、雪や霜にもよく堪えて、我慢をしたればこそ、春の朝百花に魁けして香ばしい

お師匠樣の居間

お師匠様の居間

花をもつけるのぢや。そちも行末立派に出世して、あつぱれ偉いものにならうとするならば、少しの苦勞は忍ばねばなりませぬ。よいか、解つたのう：：：：おゝ、もう泣かずともよい。涙をふいてあちへ行つて勉強しや」

一妙麿は、この情けあるお師匠様の敎訓が身に泌みて、僅かに

「はい：：：：」

と、答へたまゝ、いつまでも其處を立ち去らうとはしなかつた。

この一什始終の物語りを、涙ながらに聞き終つた母の白露は、先程より聲を立てじと、頻りに袖を喰ひしばつてゐたが、この時つひ〳〵我慢し切れずして、逃ぐるが如く密つと植込の間を拔けて出た。そしてホツと大きく息を吐きながら

「あゝ、一妙は良い師を持つて仕合せものぢや。師の房の日頃の厚いお情けといひ、今夜の身に泌む敎訓といひ、當に聞く一妙より、蔭に立聽きしてゐたこの母が、どんなに嬉しかつたことであらう：：：：」

白露は、今はもう誰に憚る人もなく、ヨ、とばかりに聲を立てながら獨り淋しい山道を我家へと歸るのであつた。

それから三日の間、一妙麿にとつては考へ深い日が夢の如くに打ち續いた。その翌晩、彼は人の寢靜まつた頃、フト夜具より顏を擡げて、靜かに前後左右を見廻はした。枕元にある行燈の火影に、二人の友は頰りに圓かな夢を結んでゐるらしい。時々口を動かしては明らぬ寢語などを云つてゐる。彼は密つと起き上がつて着物を着更へた。そしていつぞやお師匠様から戴いた黑い麻の法衣を上へ羽織つて、豫め着衣の下へ隱しておいた例の錦の帛紗包と法華經一部とを懷中した。小供の身にはその外取り纏めて身に付くべき必要の品とては一つもなかつた。彼は机の上から硯と紙を取り出してきて、暫時の間、行燈の火を賴りに、お師匠様に宛てた簡單な書置を認めた。そしてそれ

お師匠様の居間

を机の上に置くや、他處ながら眠る二人の朋友に永のお暇をして、盗むが如く密つとその部屋を出た。

彼は跫足を忍ばせながら、お師匠様の部屋の前まで來ると、そこの廊下へペタリ座つて、丁寧に小さい兩手を衝いた。

「お師匠様！　永らくの間、厚い御恩になりましたが、一妙はこれから鎌倉とやらへ參りまして、戀しい父の行方を尋ぬる所存で御座ります。父は只今、生死何れとも明りませぬが、『若し幸にして此世にお在すのなら、法華經の功德によつて、キッと神様も引き逢はせて下さるに相違御座りませぬ。一妙はたゞ、それを力に參りまする……」

と、湧きくる涙を法衣の袖に推し拭つて

「見も知らぬ遠い餘處國に行くことなれば、或はこれが一生のお暇になるやも知れませぬ。永い間の御恩返しもいたしませず、こうして旅立ちまする不

孝の罪、何卒お許しなされて下されまし……一妙若し不幸にして、途中に相果つることありましても、草葉の蔭から必ずや、お師匠様の御無事をお祈り申してをりまする……」

と、暫く涙にかきくれてゐたが、やがて彼は如何にも決心せるもゝ如くお暇いたしまする……」

「それなればお師匠様！　どうぞおからだをお大事に……　一妙はこれにて

と、慇懃に頭を下げ、それから再び跫音を忍ばせながら、涙ながらに密つと廊下を抜けて出た。

四　再び母の佗住居

餘處ながらのお暇乞ひ

「こうして寺を抜け出ては來たものゝ、若しや後で友達が目を覺まして、わ

しが居ないのに氣がついたなら、どんなにか騒ぐことであらう……のみならずキッとこのわしを、追ひかけて來るに違ひない」

一妙麿は、一種の輕い恐怖に襲はれながら、後を振り向き〳〵、寂しい山道を母の家へと急ぎ走つた。

軈て母の家の前まで來ると、一妙麿は急に打ち悄れて、暫時思案の脚を佇めてゐたが

「そうぢや、いつそ母様には話さいで、このまゝに去んでしまはふか……」

と、獨り心に首肯て、折角今來た道を二三歩後へ引き返したが

「とは云ふものゝ、後で母様がこのことを聞いたなら、どんなにかお恨みなさることであらう。矢張り逢ふて他處ながら、お別れ申して去ぬとしやうか……」

と、又考へ直して踵を廻らし、密つと雨戸の隙間から、家内の様子を覗つてみた。

と、家内ではそれとも知らぬ母の白露、佛壇の前に座を占めて、時々裁縫の手を休めては、何か頻りに物思ひて沈んでゐたが

「おゝ、大分寒うなつてきた……」

と、思ひ出したやうに襦袢の襟をかき合せて「そうぢや、早うこれを縫ひ上げて、一妙が元へ送つて進せやう」

と、又裁縫の手を進めてゆく。と、又しても裁縫の手を休めて

「まあ、私としたことが、何故今宵はこう胸騒ぎのすることであらう……若しやひよつとしたら前きの夜、あのやうなこと云ふて聞かせたが、何か一妙が身に、變つたことでも起りはせぬか。何んとのう氣にかゝる……」

と、云ひつゝ靜かに立つて後ろを向き、新しく又佛壇に香を燒いて、頻りに何か祈つてをる様子

「あゝ、あのやうにお案じなされてをるものを、一妙が若し遠い鎌倉へ行くとお聞きなされたなら、それこそこの一妙を抱いて〳〵抱き締めて、キツとやつては下さらぬに相違ない……あゝ、矢張り云はずに去ぬとしやうか……」

一妙麿は雨戸を一枚隔てたまゝ、現在こうして顔をつき合せながら、互に言葉を交はすことの出來ぬ身を、つく〴〵悲しいものに思つたのである。けれども今はそれも仕方がない。彼は法衣の袖に涙をおし拭つて

「母様！　一妙はもう暫く戻つてはまゐりませぬ……したが若し幸ひに、神佛のお力によつて、父様に廻り逢ふことが出來ましたなら、その時にはこの一妙、どんなに苦勞を致しましても、必ず一緒にお伴れ申してまゐります……母様も、嘸かしお寂しうは御座りませうが、それまではどうぞお身體をお大事にしてお暮し遊ばさるゝやう、蔭ながらお祈り申してをりまする……」

と、再び決心し直して、涙ながらに大地に跪いて母の後ろ姿を伏し拜んだ。

山の森に梟が鳴いて、雨がパラ〳〵降り出して來た。一妙麿は漸く立ち上がつて、暗い空の色を眺めながら

「おゝ、雨が降つてきた……そうぢや、夜の明けぬ中早う去ぬとせう……」

後ろ髪を引かるゝ如く、一歩往つては振り返り、振り返つては又進む、一妙麿の小さい後ろ姿が、雨と暗との中に段々薄く消えていつた。

五　旅寢の假り枕

夢を破る犬の吠聲

「や、また盗られただ。畜生！　ほんとにいめ〳〵しい奴だな」

今顔を洗つた計りの一人の百姓が、顔を拭き〳〵何か頻りに罵つてゐる。

と、丁度そこへ隣家のお爺が、これも手拭を手にしながらやつてきて

「何？　また盗られただか」

と、氣の毒そうに這入つて來た。

「鷄の雌二羽ちうもの、とう〳〵盗られてしまつただ」

と、百姓はいかにも口惜しそう

「仕方が無えこつた。こう方々で盗られちや、やりきれねえ」

「野郎ふん掴まへたら、村中で苛い目に逢はせるだよ」

「どうもそれが明らねえだ。昨夜も茂作どんちうところでは、なんでもお金を二兩ほど盗られたちうこつた」

「わしの思ふには、村にはそんな惡い奴もあんめえから、こりや何んでも他處から這入りこんだ惡い奴があるに違えねえだ」

「そうかも知れねえだよ。ことによつたら、この鈴鹿の峠に、この頃山賊が

這入りこんだちう話だから……」

朝早くから百姓共がこう話し合つてゐた折も折、丁度その時、急にけたゝましい犬の吠聲が村の端れから聞えてきた。と、間もなく村人の罵る聲なども聞えて、四邊が何んとなく騒々しい。二人はそのまま表へ飛び出して、皆の行く方へ走つて行つた。

村の端れに、茂作の汚ない一軒の物置小屋があつた。犬はその入口に立つてまだ盛んに吠えてゐた。茂作は人垣を造つて名自に不審の眉をひそめてゐる村の人々を力に、小さな手斧を持つて、勢よくその中に這入つていつた。そして二口三口詈る聲が聞えたかと忌ふと、やがて垢にまみれた十二三になる一人の小坊主を掴み出してきた。

「この野郎、太え野郎だ。小さな僻に……手前えだらうこの頃彼方此方人のもの盗みやがるのは……」

旅寢の假り枕

茂作は力まかせに二つ三つ、皆の前で小坊主の頭をなぐつた。

「おぢさんご免よ。わしや盗賊ぢやないのだから……」

「あにを云ふだこの野郎！」と例の百姓は力み出た。

「手前はな、昨夜も俺ちうとこの鷄を二羽盗みやがつたぢやねえか」

「小坊主なぐつちめえ〳〵」

と、村の人々は口々に罵つた。

群鴉に取り繞かれた鳩のやう、まだ世間を知らぬ清い一妙麿の目からは、悲しい涙がホロ〳〵と零れた。

この秋の暮、戀しひ故郷に、たつた一人の母を殘して、知らぬ旅路に上つてから、一妙麿はもう二月餘りの憂い辛い日を過した。その間、一文の路用さへ持たぬ彼は、只管人の惠みを乞ひながら、或時には行き暮れて曠い野原の草に寢たり、或は又人の軒場に寢たりなどして、漸く今この伊勢の國の鈴

鹿山の麓までやつてきたのである。

昨夜も丁度宿かす家もないまゝ、この村端れの汚い物置小屋に疲れた脚を展して、肌寒く一夜の冷たい夢を結んだのも束の間、曉方フト目を覺ましてみると、一匹の大きな犬がその入口に立つて嚙みつくやうに吠えてゐた。彼は小供心の恐しさに出ることもならず、その片隅に小さくなつて立ち竦んでゐたが、その中に四圍が急に騒がしくなつてきて、軈て彼は一人の荒くれ男の大きな手によつて、戸外へ引きずり出されてしまつたのである。

「野郎ふん縛つて、お地頭樣へ突き出すがえゝだ」

と、村人の中の一人が呶鳴つた。

「それがえゝだ」と茂作も例の百姓も賛成して「やい小坊主、さ、お地頭樣へつれてゆくからそう思へ」

「どうぞ堪忍して下され……」と一妙麿は、破れた法衣の袖に顔を避けた

がら「わしやそのやうな惡いことはいたしませぬ」

「まだ云ふだか、この野郎！」

と、茂作は再び拳を固めて手を振り上げた。

丁度この時、そこを通りかゝつた一人の浪人風の男があつた、早くも一妙磨の懷ろにある例の錦の帛紗に目を付けて、何か獨り心に默頭きながら、ヅカ〳〵つとそのところへやつきて

「某は故あつて主家を浪人いたしをりまするもの、只今計らずもこの處を通りかゝりまいたる處、如何なる理由かは存ぜねど、かゝる小供を大勢にてうち打擲、座ろに不憫を感じまいたるまゝ、失禮をも顧ず、お邪魔いたしまいたる次第、何卒某に免じて、その小供の罪なお許し下さるやう、偏へにお願ひいたしまする」

と、慇懃に頭を下げて村人に頼んだ。

「どこのお武家かは知らねえが、そう事を辨けてのお頼みなら……なあおい皆の衆、お武家にお任かせ申すとしべいか」

と、茂作は振り上げた拳を下して、村人に計つた。

「いめ〳〵しい奴だが、そんならお武家にお任かせ申すべい」

と、村人も遂に我を折つた。

「これは〳〵見ず知らずの某に早速の御承諾、厚くお禮を申し上ぐるで御座る」

と、浪人は再び頭を下げて

「こら小供、皆の衆にお禮を申さぬか」

一妙磨には、總てが夢の如くに思はれた。

「……」

彼は云はるゝまゝ、無言つて頭を下げた。

「然らば御免下され」

と、浪人は一妙麿の手をとつて、そのまゝ元と來た道を引き返して、鈴鹿の山の方へと行つてしまふのであつた。

六　鈴鹿峠の山賊の群

不思議な主從の邂逅

「こう寒くちややり切れねえ。やい野郎共、もつとどん〳〵火を焚かねいか」

こう云ひながら、車座の正面に大趺座をかいて、煙草をスパ〳〵吸つてゐるのは、この鈴鹿の峠に山賊を働いてゐる、頭の權藏であつた。

小分共は、燃木をくべながら

「眞實頭の云ふ通りだ。世間がこう詰つてきちや、こちとらまで懷ろは寂しくなる。腹は減つてくる。せめて焚火にでも炙らにや遣り切れねえ」

「野郎共はどうした、まだ皆んな歸つて來ねえぢやねえか」

と權藏は、そこに殘つてゐる四五人の子分共を見廻はした。

「あんまり仕事も無えんでせう、この不景氣ぢや……」

と、話してゐるところへ、昨夜里の方へ稼ぎに出掛けていつた五六人の小分共が。景氣よく朝の空氣に白い息を吐きながら、ポツ〳〵と山を登つてきた。そして各自に昨夜の獲物を頭の前に擴げながら、一々苦心した說明を加へてゐた。

一座は暫く色々の話や食事に賑やつた。

「ム！　蝮の宗太の野郎、まだ見えねえな」

たらふく食ひ終つた兄い株の一人がこう叫んだ

「や、あそこへ來るのが、どうやらそうのやうですぜ」

「成程！　なんだ？　小わつぱらしいのを一人連れて來るぢやねえか」

云つてる中に、蝮の宗太は昨夜盗んで隠しておいた二羽の鶏を抱えながら、

呶鳴り〳〵一妙麿を連れて歸つてきた。

「お頭、どうも遲ふなりやした」

と、ドサりそこへ坐つて、それから自慢そうに今朝の出來事を精しく物語つた。

「どうせ碌なものは持つてゐめえとは思つたが、無えよりや況しだと思つて、それで掻つ唆つてめえりやした」

「そうか、そりやあ大出來〳〵」

漸く一難を遁れ得た一妙麿は、又しても再びより大なる難に遭遇したのである。

頭は悽い目に、一妙麿をグッと睨んで

「やい小僧！　こゝは地獄の山のどん塞りで、一歩と先のねえ處だ。ぐずぐず云はず身ぐるみ脱いで置いて行きあよし、さもなければ可哀相だが命は無えからさう思へ」

と、大きな聲で威嚇した。

「わしやそんなら、このお叔父さんに欺されたのか?!」

「そんな小わつぱ野郎、欺すも欺されねえも無えんだが、え、考へても見るがいゝや」と、蝮の宗太は得意氣に横から口を入れた「人の命を援けるのに、無報酬で援ける奴が何處にある。人並みらしいことを云はねえで、早く懐ろにあるもの、これへ出せ」

一妙麿はハッと吃驚りして

「あゝもしこれは、わしの大事の寶もの、これ丈けはどうぞ堪忍して……」

「なに？　寶ものだと、盗賊にあ其の寶ものが入用なんだ」と樗藏は腮をしやくつて「野郎共、早くそいつを裸にしろ」

「心得やした」

と、二三人の小分共は、とう〳〵一妙麿を裸體にしてしまつた。と、その途端に落ちた例の錦の帛紗包み！

「これ〳〵」

と、宗太は手早くそれを拾つて、勿體らしく頭に渡した。

「あゝ、どうぞそれ丈けは……」

「えい、ぐず〳〵云ふない」

小分の一人は、一妙麿の手を拂つた。

權藏は目を皿のやうにして、綿の袱紗包を解いてみた。乾兒共は一樣に好奇の目を睜つて、皆頭の手先を見詰めてゐる。

「なんだ、こりやお經ぢやねえか……ム！　短刀！　味なものを持つてゐやがる、それに手紙が一通……」

と、權藏は叫んだ。そしてその手紙をパッと擴げながら、初めからズッと一通り目を通すと、不思議や彼の顏は忽ちに驚異の色に輝いた。

「やゝ、これは前御主人樣の御手跡！」

と、事の意外に驚きながら、つく〳〵と一妙麿の顏を打ち眺めて

「すりや和子、お身のお父上は……」

「筑紫の國の蠟奉行、大橋太郎光則……」

「あゝ、矢張りそれでは和子樣か。成程目元といひ口元といひ、見れば見る程ようお父上に似てをられる……」

と、權藏は頻りに感歎して

「やい野郎共！　早く着物をお着せ申さねえか」

と、乾兒共を叱り飛ばした。

一妙麿の着物を着終るを待つてゐた權藏は

「嘸ぞお寒むかつたで御座いませう。さゝ、どうぞこちらへお掛け下されましし……」

と、自分の座を譲つて、自分はその脚下に兩手を突きながら

「如何に知らぬことゝは申しながら、先程よりの數々の御無禮何卒お許しなされて下されまし」

と、頭を大地に擦りつけて、心から一妙麿にお詫をした。

「そなたの云やること、わしにはちつとも解らぬわ」

と、一妙麿は不審の眉を見張つて權藏を見た。

「さ、その御不審は御道理で御座りまする、これには段々仔細のあること、實は某、丁度今より十三年前、まだ筑紫の國に居りました頃、お身のお父上にお仕へ申して、一方ならぬ御恩を蒙りましたが、或時フトしたことの起りより、お父上にキツイ御勘氣を蒙つて、お手打ちにもなるべきところ、奥樣が、丁度その折お身を御懐妊中のことゝて、妾に免じて許しくれとの厚いお情け、それでやつとこの權藏、一命丈けは助かりましたが、なんにいたせ長のお暇、それから處々方々廻り歩いて、よい主もがなと探しましたが、天も吾を憎み給ふか、思ふやうな主取りもえ叶はず、とう〳〵今では下がり下がつてお恥しやこの有樣……」

と、權藏は如何にも感に堪へぬものゝ如く、乾兒共の手前も恥ぢず、深い目色の底から熱い涙をハラハラと流した。

「して、先づお尋ね申上げたきはお父上のお身の上、嘸かし今でもお國元に御無事でをられませうな」

「父樣は、丁度和殿が邸を出られたといふその年に、無實の罪を蒙つて、賴朝公の御勘氣を受け、そのまゝ遠い鎌倉の土の牢屋に入れられてしまうたわ」

「えゝッ！　すりやあのお父上が……あゝ、如何なる事情かは知りませぬ

が、お痛はしいことをいたしました」と權藏は、又新しい涙に誘はれて、「今でも矢張りその牢屋にをいでなさるので御座りまするか」

「それから最早や十三年、今はもう此世においでなさるのやら、なさらぬやら……」

一妙麿は、小さな手に涙を拭つた。

「あゝ口惜うあられたで御座いませう……」と權藏も涙を拭つて「然らばその後奥様には……」

「母様は唯だお獨りで、あの明神山の麓に見る影もない佗住居……」

「おゝ御道理で御座りまする。お寂しいことで御座りませう……」

一座は水を打つた如くしめり返つた。乾兒共は無言のまゝ驚異の目を睜つて、この不思議な主從の對面をうち見戍つた。

やがて權藏は再び口を開いて

「して和子様には、どうしてこの遠い旅路をばお一人で……」

と、その二人旅を不審かれば、一妙麿は寺へ送られて以來の悲しい思ひ出に涙を流しながら、父の菩提の爲め隣村のある古寺へ送られたことから、里の小供等に毎日父親なし子ぢや〳〵と云はれて苛められたこと、家へ歸つて初めて母に一什始終の話を聞いたこと、それから父親の急になつかしく、師にも母にも告げず唯一人、遙々この遠い旅路に上つたこと迄、殘らず精しく物語つて後

「どうぞして、わしや早う父さんに逢ひたい……」

と、そこへ泣き崩れた。

「あゝ、お聞き申せば何から何まで悲しいことばかり……權藏は丁度悲しい夢でも見てゐるやうな心地がいたしまする」

と、權藏は大きな目から熱い涙をハラ〳〵と零して

「鎌倉といへばまだ半分道、途中どのやうなことがあらうも知れませぬ。これからはこの權藏、キッと心を改めまして、鎌倉まで必ずお伴いたすことにしたしませう」

と云へば一妙麿、いかにも嬉しさうに身體を起して

「それなら、そなたも一緒にいつて下さるか？」

「えゝ、まゐりますとも〳〵。このお叔父奴が伴いてをりますれば、和子樣にはもう決して御心配はかけません」

と、權藏は更に不思議な目を睜つてゐる乾兒共を見廻はして

「やい野郎共、手前だちも先前から段々話の樣子は聞いてゐたらうが、この和子樣は權藏には大事の御主人だ。和子樣がかうして御苦勞なさるのを見て、いくら惡いこちとらでも、感じない理にやあゆくめえぢやねえか。俺あもうフッツリと今迄の惡い量見を改めて、これから和子樣を鎌倉までお送り申さうと思ふんだ。手前達も今が丁度いゝ改心時といふもの、惡い芽にいゝ華の咲きやうの無えのは、もう昔から決まつてゐらあ、なあ、だからかう云ふ今迄の惡い稼業はもう止めにして、これから眞人間になつて働いてくれろよ……」

と、優しい情を罩めてその改心を促した。彼等は皆一樣に首うなだれて、暫く無言つてゐたが、先程よりの色々の悲しい物語りに、どうやら自分達の荒くれた心も柔らいだと見えて

「眞實く頭の云ひなさる通りだ。いつまで經つても惡い芽にいゝ華の咲きやうは無え理だ」

と、一人が漸く口を切れば

「どうせ永え浮世に短げえ命……」

「太く短かくやつゝけろと……」

「かうしてやつては來たものゝ……」

「考えて見りや心細い稼業……」

「これも矢張り食へねえからの出來心だ」

「俺あもう今日からはプツツリと……」

「今迄の悪い量見を改めて……」

「眞人間になるとしやう……」

と、他の者共も殘らずこれに同意した。

權藏はいかにも晴やかな顔容に、再び一同を見廻はして

「おゝ、よう云ふことを聞いてくれた。かうしてお前達まで心よく改心してくれてこそ、この權藏も眞實く改心甲斐があると云ものだ」

と、滲みくる嬉し涙を密つと手の裏に拭ひながら

「かうと皆の話が決まつてみれば、思ひ立つたが吉日だ。な、おい野郎共

……じやねえ皆の衆、いつまで茲にかうしても居られめえから、これからボツボツと此の山を下るとしやう」

と、それから權藏は、何くれとなく乾兒共を指圖して、暫くの間そこらあたりの後仕末をなし、それより少しばかりの盗みためたものなぞ、皆それ〴〵に乾兒共の前に頒け與へて

「あゝ、これで何んだか恁う氣が清々した」

と、云ひながら、靜かに一妙麿の前に小腰をかゞめて

「さ、和子樣、どうかこの叔父奴におん負して下さいませ」

と、一妙麿をお負つて立ち上がつた。

「おい、皆の衆も一緒に山を下らうぜ……」

一同は交る〴〵一妙麿を負ひながら、何處ともなく東を指して山を下つた。

七　鎌倉鶴ヶ岡の八幡宮

一心罩めた法華經の讀誦

三月あまりの道中に、長い間憂き艱難を重ねて、漸く夢にのみ通ふた懷かしい鎌倉の地を踏んだ時、一妙麿は如何にうれしかつたであらう。彼は筑紫の國の片田舍とは違つて、山の手一面に並んだ諸大名の高壯な館邸を望んでは、その雄大な結構に驚きの目を睜り、又下町の賑かな人混の中を借つては、その左右に軒を列ねた美しい店などに氣を奪はれつゝ、權藏に片手を引かれたまゝ、疲れた足を引きずりながら、先づ第一に八幡宮へお參りをした。そして暫くの間、權藏と共に御拜の前に跼つて、一日も早く父親に廻り逢はるゝやう、專心祈願を罩めてゐた。

「和子、お身達は何處よりござつた」

先程より一妙麿主從の樣子を、如何にも事あり氣に眺めてをつた一人の堂守は、その時丁度符を作る手を止めて、突然かう一妙麿に訪ねた。一妙麿主從は殆んど空を摘むやうな目的のため、遙々この知らぬ都に來たものゝ、偖、何方へ身を寄せるといふ知己もなく、四方の賑かさに引き代へて、心は益々暗くなる計りであつた。然るに今知らぬ人より、突然思ひもかけぬ問を得て、丁度地獄で佛にでも逢つたやう打ち喜び

「あい、筑紫の國からまゐりました……」

と、なつかしさうに堂守の顏を仰ぎ見れば

「あゝ、それは又遠い處から……」と更に二人の樣子を見上げ見下しながら「何か心願の儀でも御座つてか？」

と、云へば權藏すかさずその問を引き受けて

「仰せの通り我等主從、實はチト心願の義あつて遙々この地までまゐりしも

の、なれども如何せん寄る邊なき身には、この鎌倉中に宿さへ貸すに人もない有様……」と遉に鼻をつまらせて「したがそれには幸ひにも、これなる和子様には、少し由ばし候て今は出家の御身分、お經も早や一と通りはお心得遊ばすことなれば、何卒御坊のお計らひにて、このお堂にお使ひ下さる理にはまゐりませぬか」

と、恐るゝ如く堂守の顔色を覗へば、堂守は如何にも氣の毒に思ひ

「聞けばどうやら悲しい身の上……愚僧一人の量見にも罷りならぬが、何とかよしなに取り計らひ得さするで御座らう」

と、そのまゝ奥へ姿を隠したが、やゝあつて再びそれへ現はれて

「何は兎もあれ、執事の坊も見ゆることなれば、あちらより上がつてお逢ひ下され」

と、親切に二人をお堂の側に導ひた。二人はしみ〴〵とその篤い情をうれ

しく思ひながら、足を清めて上へ上がり、恐る〳〵堂守に導かれて執事の坊の部屋に畏つた。

執事の坊と云はるゝは、年頃六十餘りの立派な老僧、その太つた柔和な顔に、時々暗い影を見せながら、二人の話す身の上話を概略聞き終つて

「おゝ、ほんに悲しい身の上話！　愚僧もつい〳〵貰ひ泣きをいたしました……」と法衣の袖に涙を拭つて「したが一心は岩をも通すの道理、若しお父上にしてキッと此世にお在すなら、そなた方の強盛な念願によつて、必ずや正八幡大菩薩も引き合はして下さるに相違ござるまい。このお堂にも今丁度人手のないところ、それ故それまでは、一妙殿にはこれから毎日お堂で常經の役、權藏とやらには庭など掃除してもらひませう」

と、いと情けある言葉に、二人は恰かも蘇生の心地して

「あゝ、見ず知らずの我等主從に、斯程まで御親切なるお言葉を賜ること、

何ともお禮の申しやうも御座りませぬ」

と、權藏は涙を流しながら、小さな主人に代つて篤くその原意を感謝した。

その翌日から、父を思ふの一心より、專心法華經を讀誦する、一妙麿の鈴を轉ばすやうな美しい聲が廣いお堂の隅から隅へと物哀れに響き渡つた。毎日群集する參詣人は、皆足を止めてこの憐らしひ小さな新客の美しい聲に聞き惚れた。中には子を持つ若い女など、何かは知らず感極まつて、密つとお堂の隅に袖を絞るものさへ度々見られた位である。權藏も毎日その聲を聞きながら、時々庭を掃除する箒木の手を休めては、人知れず熱い涙を拭つてゐた。

「今にお經の御利益で、キツとお父上の安否も知れませう……」

一妙麿の顔を見る度毎、いつも權藏はこう云つて小さな主人を慰めてゐた

この正八幡宮といふは、當時鎌倉殿及び北條一門の氏神として神靈最も驗

著に、滿天下の信仰を悉く一社に集めて、朝夕參詣人の絶ゆる暇とては少しも無かつた。一妙麿はその數多い參詣人の中から、いつも立派な武士姿の人を見出しては

「あゝ、若しあのお武家がお父上であつたなら……」

と、涙ぐむことも度々であつた。

かうして一妙麿が、この八幡宮にその美しいお經の聲を聞かせるやうになつてから、丁度一週間目のことであつた。彼はその日の晝過ぎ頃、フト堂内の騷がしさに、見るともなく經讀む目を外らして、密つとその樣子を打ち見やれば、これは又今迄に見る參詣人とは事代つて、四十餘の綺羅びやかな美しい貴婦人が四五人の若い腰元を引きつれて、執事の坊に案内されながら、專心經讀む一妙麿の前を通つて靜かに神前近く座を占めた。そしてやゝ暫くの間、祈願を凝してゐた樣子であつたが、やがて間もなく群集する他の參詣

人の尊敬と羨望との中に、その美しい姿を隠してしまつた。一妙麿は心の中に

「いづれお大名かなんぞの奥方であらう

と、思ひながら、經終つてそのことを執事の坊に訪ねると

「あのお方こそ、當時飛ぶ鳥も落す鎌倉殿の御臺様じや。時々あゝしてお忍びで御參詣遊ばされる」

とのこと、田舍者の彼はこれを聞いて、そうした高貴のお方にも、親りお目にかゝれるやうになつた今の境遇を、つく〴〵不思議なものに思つたのである。

御臺様は、その翌日も亦同じ時刻に御參詣遊ばされた。そして昨日の如く矢張神前に跪座して專心祈願を捧げて居られたが、祈願終るも例の如く座を立たれず、そのまゝ暫く丁度物にでも魅せられたかの如くジッと聽耳を立て、

一妙麿の美しいお經の聲に聽惚れてゐた。

「まあ、何んといふ美しいお經の聲であらう……」

彼女はやをら座を立ちながら、左右の腰元共を顧みて、かう小聲に呟いた。

その翌日も、その翌日も、御臺様は續いて參詣遊ばされた。そしてその度毎、今までよりはより長い時間をいつも神前に費やして、心ゆくまで一妙麿の美しいお經の聲に耳傾けてゐた。

或時御臺様は執事の坊に向つて

「彼れは如何いふ者ぢや」

と、尋ねられた。執事の坊は慇懃に畏みながら

「彼れは一妙麿と申するもの、チト心願の儀あつて遙々筑紫の國より參じました小坊に御座りまする」

と、お答へした。すると御臺様は如何にも感に堪へぬものゝ如く

鎌倉鶴ヶ岡の八幡宮

「おゝ、ほんに憐らしい小坊ぢや」と暫く何やら考へてをられたが、やがて氣づかはしげに執事の坊の顏をさし覗いて

「お堂の都合もあらうなれど、暫くの間あの小坊を、この妾に取らせまいか？」

との御掟。執事の坊は快く

「お上の仰せ、如何やうとも宜敷きやう願はしう存じまする」

と、申し上げた。

「おゝ、早速の御承知、忝く思ひまする」

と、その日はそのまゝ御機嫌麗しう御館へお歸りになつた。

一妙麿は不思議な因緣を以つて、その翌日御館からの使者に迎へられて暫くの間の惜い別れを權藏に告げた。

「和子樣の御一心から、漸く神佛の御加護が降つて來たので御座いませう。

どうやらお父上も御存生でをられるやうな氣がいたしまする……」

と、權藏もその不思議な因緣に、何か嬉しひ暗示にそゝられるやうな氣持がして、出で行く一妙麿の小供心を慰めた。

八　鎌倉殿の御館

お經の布施に父の一命

いよ〳〵鎌倉殿の御館に引き取られた一妙麿は、四圍の美々しい光景に膽を奪はれながら、四五日の間を殆んど夢の如くに打ち過した。彼は如才ない御臺樣の周旋によつて、先づ第一に大殿樣賴朝公の御機嫌を奉伺し、次に筑紫の國で名のみ聞いてゐた誰彼の立派な武士にもお目にかゝり、又澤山の腰元共にも引き合はされて後、大奥の一室美しい持佛堂の小さな主人となつた。

賴朝公は元より法華經の信者、自らも經を讀み、又經を書寫して、朝夕の

看經さへ暇ある時には決して怠るやうなことは無かつた位である。それ故程遠からぬ持佛堂に、毎日幽かに聞ゆる一妙麿の美しいお經の聲を聞いては、何時も爽々しい氣持に心を澄して、浮世の殺伐なる利欲を忘るゝ事も數々であつた。御臺樣も時には經讀む一妙麿の後ろに端座つて、一緒に誦經を續けることも稀らしくはなかつた。かくしてさしもに廣い館の中も、一妙麿の美しいお經の聲の漲る處、そこには一片邪惡の念を抱く者もなく、清新の氣は四邊に充ち滿ちて、眞に惡鬼もその便を得ることは出來なかつた位である。

一妙麿は最早や御臺樣始め、多くの腰元共の寵愛の中に、知らず一月餘りの日を過すことゝなつた。彼の愛らしい可憐な容貌と、その美しいお經の聲とは、益々諸人の愛敬を高めて、その周圍にはいつも小供に相應しいお菓子の供養など絶ゆる暇とては無かつた。けれども彼はさういふ意得の中にも、時々人知れず法衣の袖を濡しては、憐れな父親のこと、さては權藏のことなど、色々と思ひ續けてゐた。

丁度或日の夕暮方、いつもの如く一妙麿は持佛堂の靈前に端座して、專心經を誦しゆく中、突然その耳朶を破つて、戸外に唯ならぬ人々の詈り騷ぐ聲を聞いた。彼はフト聽耳を欹てゝ、思はずその方を打ち見やつたが、元より館の奥深い持佛堂のことなれば、その樣子は見得べくもない。彼はそのまゝ氣にも止めず又專心に經を續けて行かうとしたが、戸外の聲の漸く遠かつて、由井ケ濱の方に消え去つた頃、一妙麿の鼓動は不思議に高まつて、何故かお經の聲さへ自づと震へてきた。彼は心の中にこれを怪みながら、幾度か氣を取り直してはお經を續けてみた、と、續くれば續くる程、胸の鼓動は高まつて、お經の聲は一層震へてくる。

「あゝ、この動悸は何としたことであらう。……若しや一妙が身をお案じなされて、母樣に惡いことでも起つたのではなからうか。それとも御師匠樣

に變つたことでも起りはせぬか。何となう氣に掛る……」

と、一妙麿は遙かに思ひを絶えて久しい故郷に走らせた。

「したが不思議なのは、先程戸外に聞えたあの騒がしい聲！　それが爲め胸の動悸も高まり、お經の聲も自と震へて來た……おゝ、今日はもうこれにてお經は止めませう」

と、彼はそのまゝ經を收めて立ち上がり、寂しさうに窓の障子を開けて戸外を眺めながら、聞くともなく風に送られて聞えてくる浪の音に耳を澄してゐた。と、丁度そこへ御臺樣は片手に紙へ包んだお菓子を持ちながら、莞爾に持佛堂へ這入つて來た。

「おゝ一妙、嘸ぞ疲れたことであらう。さ、こゝへ來や。御褒美にお菓子を取らせませう」と、一妙麿を招いでそこへ坐り「今日は妾もホンに暇なれば、ゆる〳〵筑紫の話でも聞かせて給はれ」

と、一妙麿にお菓子を勸められた。

「御臺樣！」と一妙麿は考へ深い目を突然彼女の顏にさし向けた「先程戸外に聞えましたあの人聲は、何故の騒ぎに御座りませう」

「そなたは又異なことをお云やるのう……」御臺樣は不思議そうに一妙麿の顏を眺めて「あれは長年土の牢屋に入れられてゐた罪人が、今日漸くその罪も決つて、先程首斬られに由井ヶ濱へ連れ行かれたのぢや。それで途中あのやうに騒いだのであらう」

と、事もなげに説明する

「おゝ、あの由井ヶ濱へ頸斬られに……」と一妙麿は思はず聲を放つて「何といふ可哀相なことで御座いませう」

と、我身の父に引き較べて、熱い涙をホロ〳〵と零した。

御臺樣は、この憐らしい一妙麿の樣子に、益〻不思議の思ひを抱きながら

鎌倉殿の御館

「何故そなたはそのやうにお泣やるのぢや」

と、優しく一妙麿の顔をうち覗けば

「あい……」

と、一妙麿は漸く法衣の袖に涙を拭つて

「實はこの一妙に十三年前、まだ顔さへ知らぬ一人の父さんが御座いました……」と、初めて自分の悲しい身の上話を、涙ながらに精しく物語つて「それでかうしてこの鎌倉まで、遙々父さんを尋ねてまゐりましたが、はや十三年前と云へば昔のこと、今ではもうその土の牢屋にお居でなさるのやら、なさらぬやら……」と歔欷り上げながら「先程の罪人も、丁度一妙が父さんにより似た身の上と思へば、つひ悲うなつて泣きました」

と、包まず一什始終を打ち開けた。

御臺様は、初めて聞く一妙麿が身の上に、今更ながら不憫さ百倍して

「すりやそなたの父さんが、この鎌倉の土の牢にとお云やるのか？　してその父さんの名は？」

と、もうその美しい目に涙を一ぱい宿してゐる。

「あい、大橋太郎光則……」

「おゝ、あの大橋太郎光則？！」と御臺様は思はず喫驚りして「一妙！　そんならあの罪人こそ、眞んにそなたの父さんぢやわ」

「えゝッ、あの先程の罪人が？！」と一妙麿は聞くより疊にわつと泣き伏しながら、一時に迫りくる嬉しさ悲しさに殆んど氣も狂はん計り「すりや父さんには、まだ此世に御無事で居られたのか、あゝ、そしてたつた先きの今、とうゝ頸斬られに行かしやつたか……」

と、身の置き處もなく泣き悲んだ。

「おゝ一妙、そのやうにお泣きやるな、この妾がキッと援けて得させませう」

と、そのまゝ御臺様は、一妙麿を後に殘して、裾の捌きも慌だしう夫の居間へ駈け込んだ。そして手短かに一什始終の話を物語つて

「何卒お上のお慈悲を以つて、早々彼が一命をお助け下さるやう、偏へに願はしう存じまする」

と、自分のことでもある如く、疊に額を摺りつけて、その助命を願つたのである。

頼朝公に於ても元より否やのあるべき筈はない。

「然らば早速早馬を……」

と、茲に一頭の早馬を仕立てさせて

「早々、彼が命を助けよ！」

と、言葉急しく命令した。

使者の武士は、宙を飛ぶが如く、瞬くうちに由井ケ濱まで馳せつけて、ヂ

ッと遙かに刑場の方を打ち見やれば、今や太刀取と覺しき者、彼が背後に廻つて一刀高く振り翳しつ、ハッシと計りに切り下ろそうとするところ、これを見た使者の武士は、恰も狂氣の如く顔振り上げ

「その罪人暫く待つた。殿の仰せなるわッ！」

と、聲高々に呼はりながら、漸くその場へ乘り詰めて、危き彼が一命を取り止めた。

不思議な使者に、危き一命を助つた大橋太郎は、長い牢獄の生活に見る影もなく痩せ細つた身體を、荒縄もて十重二十重に縛められながら、使者に引き連れられて、再び明い娑婆の道を引き返へした。そして何故の助命かと心の中に怪みつゝ、暫く警護の武士に取り繞かれて、お館の門前に佇んでゐた。

一旦門を潜つてその姿を隠した先程の使者は、再びそれへ現はれて

「殿の仰せなれば、余と共に裏庭へ廻つてよからう」

と、そのまゝ警護の武士と共に、大橋太郎を奥深い裏庭の方へ案内した。

夕暮の薄暗は、刻々四邊の木々に迫つて、寂寞の氣は悄然と白洲の上に引き据えられた大橋太郎の身邊に流れてゐた。一座は水を撒つた如く靜まり返つて、その不思議な御下命を待ち受けてゐた、と、やがて裏坐敷の襖が音もなく左右に開かれて、そこへ現はれたのは大將軍頼朝公、續いて御臺樣に、可愛らしひ小坊一人！　並み居る人々の目は、みな一樣にこの不思議な小坊の上に注がれた。この時頼朝公は嚴然として威儀を正しながら

「太郎光則、苦うない面を上げえ」

と、ヂッと遙かに太郎を見据えられた。

「ホ、ッ！　恐れ入り奉ります……」

と、太郎は僅かに頭を擡げたまゝ、恐る〳〵座敷の方を仰ぎ見た。見ればその顏は、長い間の苦みに痩せ衰へて、色は褪蒼め目は凹み、鬢髮蓬々とし

て見る影もない有樣、一妙麿はこの淺ましい父の姿を見て、法衣の袖に顏を掩ひながら、聲を殺して泣き悲んだ。この時頼朝公は、やをら泣き入る一妙麿を振り向いて

「一妙！」と聲嚴かに呼据ゑた。「汝が今迄讀みしお經の布施として、あれなる者を汝に取らするであらう」

「おゝ、早う行つて、あの繩を解いてやりや」

御臺樣も共に情けを添ふ言葉に一妙麿、我にもあらず立ち上がつて、轉ぶが如くに庭下駄を突つ掛け、夢かと計り馳せ寄りつ、確と父の胸先に取り縋つて

「おゝ父樣！」

と、後は涙に搔きくれながら、紅葉のやうな手に、その荒繩を打ち解けば、太郎は少からず膽を消して

「おゝ、忝いそなたの取り傚し……してこの我を父さんとお云やるは！」

と、掛懸な顔に一妙麿の顔を差覗けば、一妙麿はせきくる涙の目にヂッと太郎の顔を見上げながら

「あい……」

と、答へて急ぎ懐中より例の錦の袱紗を取出し

「これは父さんからの大事の遺品ぢやと、母さんがそう云ふてぢや」

と、太郎の前に差し付くれば、如何にも見覺えのあるその袱紗、太郎は急ぎ震へる手先にそれを開いてみて

「おゝ、これは今より丁度十三年前、胎の中なる小兒へと、妻に遺した短刀と文！」

と、如何にも懐舊の情に堪へぬもの〻如く、ヂッと一妙麿の顔を打ち見戍つて

「すりや、そなたは眞んに我子であつたか！」

「あい、父樣……」

「おゝ、我子よ……」

「お懐しう御座りまする……」

「むゝ、懐しう思ふぞよ……」

二人は相抱いて、そのまゝそこへ泣き崩れた。將軍始め御臺樣は勿論のこと、一座の人々は皆この憐れな親子の對面を見て、何も涙の袖を絞たのである。

斯くて大橋太郎光則は、不思議にも見知らぬ我子に危き一命を助けられて、暫の間一妙麿と共に御館に引き取られてゐたが、一妙麿の一時も早くこの事を、獨り寂しく故郷に待ち佗ぶる母上に告げ知らせんと催促まゝ、御館には原くお禮を申し上げ、權藏の罪をも許して之を呼び寄せ、三人は或日樂しく

鎌倉殿の御館

思出多い鎌倉の地を辭し去つた。

あゝ、夫に別かれ子に捨てられて、獨り寂しひ片田舍に、毎日東の空を望んでは、せきくる涙に袖を霑してゐた白露が、突然この三人を迎へた時、彼女は如何に喜んだことであらう。抱いて〳〵抱き締めて、いつまでも〳〵一妙麿の身體を放さなかつた。

法華魂終

法華魂
定價壹圓廿錢
大正六年六月十一日印刷
大正六年六月十一日發行
著作者　青木白風　靜岡縣田方郡上大見村
發行者　土井啓正　東京市麹町區內幸町一ノ五
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
發行所　東京市麹町區內幸町一丁目五番地　新日本社　電話新橋二八二八番　振替口座東京一一八二八

不許複製

破天荒の新研究

疑問の獨逸皇帝

□カイゼルの心臓を流るゝ血を鏡檢して彼を
□精神病者と斷定せし日本未曾有の奇著現る

侯爵大隈重信序　米國哲學博士モルトンプリンス原著
法學博士　鹽澤昌貞校閲並序　相馬由也譯

最新刊

カイゼルの心理解剖

四六版背皮箱入　定價八十錢　稅八錢

世界大動亂の張本人獨逸皇帝の心理を解剖して、英雄氣取りの高慢長じて偏執狂に陷れる精神病者なりと斷定せる世界第一痛快無比の新著にして、然も其斷案一根據あり深く病竈を抉つて骨に達せんとす、獨逸の眞相に通ぜんとする者は速に本書に就け。

賜天覽台覽

カイゼルは世界の大英雄？
カイゼルは果して精神病者？

侯爵　大隈重信序　文學博士　久米邦武
早大教授　永井柳太郎　合著

新刊

支那大觀と細觀

洋裝四六版
箱入四二〇頁
定價壹圓卅錢
郵稅八錢

六月五日發賣

永井教授の新進政治學者として識見超邁の人なるは、既に世に定評ある所同氏の去々夏北清の遊を了りて歸るや、其第一印象に本いて東西文明に對し、明快に論斷せるもの之を支那大觀と爲す。されども餅は固より餅屋に如かざるにより、肯て自ら是を以て久米博士の論評を請はる、久米博士は誰も知る學和漢の古今に通じ、而かも燃犀の史眼、人は常に物の皮肉を見るに博士は常に骨髓を透視せずんば已まざるの概あり、此博士にして永井氏の支那大觀を仔細に論評せるもの、之を卽ち細觀と爲す。前者の不備を補ひ、誤謬を正して寸毫も假借せず。而して別に一個雄大の見地に立ち、支那民族竝に其文明の眞相を敎示し來る。一讀心胸を豁からしむるものあり、兩篇相對照する處に、金石相擊つ無限の妙響を聽く可し、支那通たらんとする者の必讀を要す

獨逸副宰相　ヘルフエリヒ博士著
早稲田大學教授　永井柳太郎譯

獨逸富强論

再版

洋裝箱入四六版二〇五頁
定價金九拾錢
郵税内地八錢
臺、滿、朝、樺拾貳錢

「吾等は統一後の獨逸帝國史を繙くに當り、常に獨逸國民が如何なる程度の準備を以て植民的競爭に臨み、世界的競爭場裡に出現したるかに注意する事を忘れてはならぬ。日本國民も獨逸國民と等しく世界の競爭場裡に最も後れて出現した從つて兩國民は、種々の點に於て頗る境遇の相似たるものがあつた。（中略）我國民は精神的にも、又物質的にも慥に發展を遂げ得たに相違はないが、併し吾等の玆に考ふべき事は、此等の發展が果して吾等と境遇を同うしたる獨逸國民の發展に比較して遜色なきを得るや否や、又我國民の世界的競爭に比較して劣る所なきや否やと云ふことである」とは譯者の言也、薫猶を一器に盛り、獨逸が敵國也と其長所を迄も一併して棄て去るは陋也。本書に就て獨逸の富强の淵源を知るを要す。

侯爵大隈重信閣下序
文學博士　久米邦武先生著

裏日本

再版

洋裝四六版五一六頁
定價壹圓五拾錢
郵税内地八錢
臺、滿、朝、樺拾貳錢

日本海を見る事小河の如く、其左右兩大陸を跨ぎて活躍せる我古代を憶へば、今の裏日本は慥に昔の表日本なりき。本書は此今の裏日本にして昔の表日本なる山陰の史觀を、現代史界のオーソリチーたる久米博士の講述せられし者、大江山の鬼窟、高師直の失戀、鹽谷高貞の死所、後醍醐天皇と名和長年、山名時氏の人物、神火神水と千家北島の紛爭、佐々木高綱と乃木家、八岐の大蛇と超人、山津見海津見兩族の勢力、天日槍時代の出石、惠比須三郎と美保關、三種神器の眞體等より牛馬の牧、朝倉山椒鰭年魚の微に至る迄、苟も博士の歷遊の眼に觸れたる一切の事象にして本書に含まれざるはなく、一々其燃犀の史眼に照して千古の疑團を解き、精詳なる說明を下せる處、其材料の爾く多端なるに似ず、得る所の知識は極めて明快、餘情極らず、何人も其續後の感に、適れ自ら一大學匠と化了りしとの自信あらん。文章平明、學者非學者共に讀むべし。